昭和47年10月22日発行通巻83号(毎日曜日発行)　昭和46年2月5日国鉄首都特別扱承認雑誌第516号

AE 朝日=ラルース

10/22
220円
83

週刊 世界動物百科



朝日新聞社

読者のみなさまへ

こんな動物が登場します　この〝百科〞は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（2），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《1～128号の内容は表3参照》

総目次と総索引がつきます　見て，読んで，楽しむ〝百科〞としてだけでなく，引いて調べる〝事典〞としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

「私たちの仲間」のページ　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〞として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

ファイルで保存してください　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〞全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表3「本誌の購読について」をごらんください。

目　次

世界動物百科　第83号

カラーページ

私たちの仲間

監修 執筆　浦本昌紀（山階鳥類研究所所員）
内田康夫（浦本野外動物研究会会員）
安部直哉（浦本野外動物研究会会員）
翻訳　島津　智（翻訳家）

凡　例
□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注1〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

◆日本迷鳥録◆ 18

キガシラシトド

Zonotrichia atricapilla



文　内田康夫
え　木村しゅうじ

手前が成鳥
向こう側は幼鳥

前回のミヤマシトドにきわめて近い種類にキガシラシトドというのがある。やはり，北アメリカ産だが，前種が東海岸から西海岸まで広く分布するのに対し，キガシラシトドは，アラスカからブリティッシュ・コロンビアにかけての西部山地にだけ分布している。樹木限界に近い高地の矮生針葉樹林のあいだの灌木帯にすみ，冬は西部山地に沿ってメキシコ北部近くまで南下する。全長約17センチ，成鳥の頭上はあざやかな黄色で，その下方に太い黒色の眉があり，翼尾は褐色，下面は灰色みを帯びている。

日本への迷行は，1925年12月10日，東京都葛飾区の荒川放水路近くで採集された雌1羽だけである。ついでにいうと，この記録も，前回のミヤマシトドの初記録も，ともに古川竜城氏の手によるものである。

なお，「シトド」というのは，ホオジロの古名で，現在の分類学では，アメリカ合衆国産のホオジロ科の鳥に対してのみ用いられている。■

ニッポン列島探鳥記 5

撃つために育てられる国鳥キジ

日本列島の山肌が紅や黄に色づき，雪の便りがチラホラ聞かれるころ，期待に胸はずませ，猟銃の手入れに余念のない人たちがいる。11月1日（2月15日まで），猟の解禁を目の前にして，居ても立ってもいられないハンターたちである。ことしもまた，山野の鳥獣たちにとって〝受難の季節〟が到来する。

ハンターの数は，近年のすさまじい狩猟ブームにのって急激にふえている。全国の狩猟免許交付を受けた者の数をみてみると，1968年度が44万9000人，1969年度49万1000人，そして1970年度には53万2000人と，とどまることをしらない。

東京・目黒にある林業試験場の白井邦彦氏は，このブームについて，

「鉄砲に対する魅力はさることながら，人びとの生活が豊かになり，暇ができるようになったことが大きな原因でしょう。若い人たちは，50万円も60万円もする猟銃を簡単に手に入れる。それに，交通の便が非常によくなり，車で目的地にまで楽にいけるようになったこともある」

という。かれは狩猟歴30年という大ベテランである。狩猟は，とくに最近，若者に人気があり，ハンター全体の約20パーセントが20歳代である。

キジが狩猟鳥の王様

さて，猟の解禁ともなれば，ハンターたちは，猟犬を引き連れ，愛用の鉄砲を肩に，日本各地へと散っていくのだが，かれらにいちばん人気のあるのは，なんといってもキジ。

「猟はやはりキジですな。飛びたつときのあの豪快な羽ばたきの音。タタターン！　こだまする銃声。ズッシリした手ざわり。こたえられないですよ」

ハンターたちは，口をそろえてキジ猟のだいご味を賞賛する。キジは，イヌとコンビを組んで狩りをするのに最適である。日ごろから訓練された猟犬が，においから獲物を捜しだし，ハンターと呼吸を合わせてみごと撃ちおとすまでの過程が，ガンハンティングの理想にぴったりなのだ。



放鳥されるキジ。3年後には，ハンターのえじきになることも知らず，元気に飛びたつ。南伊豆にて。

「キジは山里近くの茂みにいましてね。神経がずぶといのか，ギリギリ近づくまで逃げださないんです。イヌがポイントする。風向き，周囲の地形をすばやく計算する。銃を構える。〝ヨシ，いけ！〟イヌが吠える。追いたてる。舞いたつ……。飛翔力が強いから寸分の気のゆるみも許されない。まさに息づまる一瞬です」

なるほど，全長65センチ，体重1.2キロもある雄キジのからだつきは実にみごとだ。それに容姿が美しい。ほお，首，背の藍緑色は光に輝き，目のまわりの裸出部の赤さは，まなざしに鋭さをそえる。後頭部の両側にある緑色の飾り羽は風にふるえ，長く引く尾に黒い帯状の斑点が映える。

「ギ・ケーン！」凍てつく青空をめがけ鋭角に飛びたつとき，キジが〝猟鳥の王〟であることをだれも疑わない。キジは，ハンターの欲求をじゅうぶんに満たしてくれる猟鳥ナンバーワンとして，狩猟の世界に君臨しつづけているのだ。

ところで，キジ肉の味のほどはどうなのだろうか。

「あまりおいしいとはいえない。ニワトリのほうがまだましではないんですか。チョッとくさくってね」

と，いう人もあるが，これに対し，白井邦彦さんはいう。

「現代の日本人に，キジ肉のほんとうの味がわかってたまるものですか。バターやチーズで慣らされた舌は，もはや日本人の舌じゃない。あの淡白な舌ざわりのなかにほとばしる清水の味わい，ほのかに漂ってくる新芽の香り，まさに日本的な味なんです」

ある無法ハンターの告白

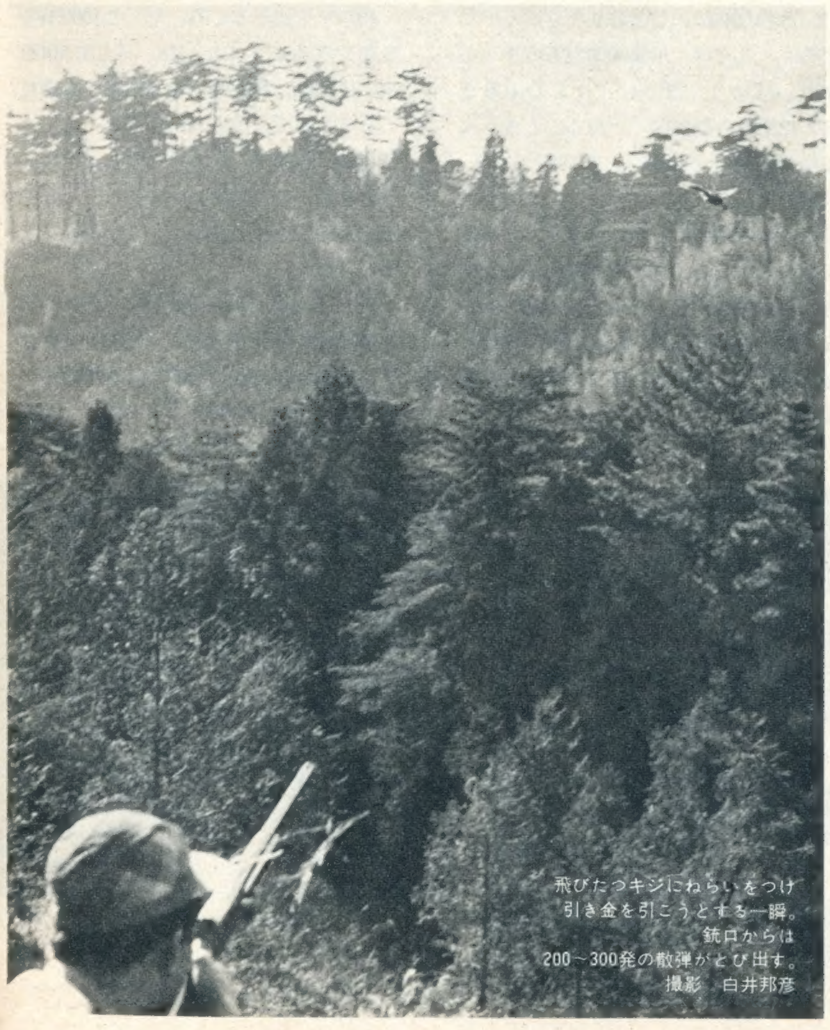
それでは，いったい，年間にどれくらいのキジが捕獲されているのだろうか。

環境庁の統計でみてみると，1968年度が63万羽，1969年度64万羽，1970年度79万羽と毎年着実にふえている。しかし，他の猟鳥との比較を1970年度でみると，キジバトの300万羽，コジュケイの130万羽，カモ類の93万羽とくらべてみて，ハンターたちが目の色を変えて追いまわしているわりには少ない。なんとハンターひとり当り1.5羽の割合でしかないのだ。キジが少ないのか，ハンターが多すぎるのか。

「キジが少なくなっていることはいまさらいうまでもありません。それにハンターの側にも大きな責任があります。キジは1日に1人当り2羽しかとってはいけない（1963年から）のですが，しかし……」

あるハンターは告白する。

「実際，山にはいって猟をするとき，そんなことは頭にありません。いくらでも出合えば，夢中になって撃ちまくる。あとになって悪いことをしたと思うんですが，撃ってしまったものはしかたがない。草陰に隠しておいて，なんとかバレないように持ち帰るのです」



飛びたつキジにねらいをつけ引き金を引こうとする一瞬。銃口からは200～300発の散弾がとび出す。
撮影　白井邦彦

大きな声ではいえないことのようだ。しかしかれは，あたりかまわず続ける。

「キジは雄しか撃ってはいけないのですが，これもまたたいへんなことで，そのときは一種興奮状態ですから，雄と雌を見分ける余裕などありはしません。雌を誤って撃つことはザラです」

そして最後に，かれはつけ加えた。

「これは，猟をやりはじめのころの話で，腕に自信のついた今では，そんなこともまずありませんがね……」

大日本猟友会（会長・徳川義親氏）事務局長，石橋豊氏の顔が目の前に浮かぶ。せんだって話を聞いたとき，かれはいった。

「ときたま，不心得者がいましてね。規則は守らない，他人に迷惑はかける。こういう一部の者が，狩猟家批判の種をばらまいて歩いているのです」

確かに，一部のハンターの非道徳な行為が，猟友会全体に対する批判を助長していることは事実だ。

「イヌが畑を踏み荒らすし，あんなにやたらとバンバン鉄砲を撃たれたのでは，落ち着いて仕事もできない」（実際，しじゅう事故が起きている）

「山のミカンをそっくり，車に積んで持っていったり，庭の盆栽を盗んでいったり……」

遠くから，勇んで乗りこんできたのに，獲物はさっぱり。その腹いせの犯行らしい。

白井さんは狩猟についていったものだ。

「猟の極致はスリルと冒険です。その精神は，エベレスト登頂を試みるのと同じですよ。猟も〝そこに鳥獣がいるから〟やるんです。鳥獣は，人間よりはるかにすぐれた感覚機能をもっている。それらの未知なる力と，人間の頭脳とのあくなき戦いなんです」

そこには，崇高な人間性が存在するというのだが，それはいったいどこへいってしまったのだろう。狩猟は紳士のスポーツと欧米ではいわれているが，わが国では，ぐっと品が悪くなってしまう。



山の斜面に，張りめぐらされた網。年間5000羽が巣立っていく〝キジのふるさと〟である。

「先日も，東京・四谷のある主婦から，――最近，庭にウグイスが全然こなくなった――と，猟友会に苦情の投書がきたんです。もうこうなると，なにもかもすべてが猟友会の責任なんですなあ」

石橋氏は頭をかかえこむ。こういった輩は，猟友会でも悩みの種らしい。

バカにならぬ猟政関係の収入

1963年，政府（農林省）は，急激に減少していく野鳥対策として，各都道府県に，キジの放鳥（90日びな以上が原則）を割りあて，義務づけた。その年，全国で約6000羽のキジが放鳥され，その後も毎年ふえつづけ，1970年度には5万9000羽，1971年度には8万羽，そしてことしは，11万羽の放鳥が予定されている。

静岡県でも，鳥獣保護事業計画の一環として，1964年以来〝ふやしてとる狩猟〟に力を注いできた。毎年のキジの放鳥にも非常に積極的で，1971年度には3500羽，ことしは4000羽近くの放鳥を予定するまでになった。したがって，県下のキジの養殖も盛んで，栃木県，福島県に次いで全国第3位。全国猟鳥用キジ生産数約12万羽（1971年度）のうち，7000羽近くを生産する。

静岡県内で1970年度に狩猟免許の交付を受けた者は2万2000人。これも，長野県，福島県に続いて第3位である。猟政関係の収入状況（1971年度）をみると，狩猟免許税（4500円），入猟税（3000円＝目的税），講習手数料その他をざっと計算すると，1億5000万円近くとなる。

また，狩猟免許交付を受けたもののうち，県外者の数はその1，2割。かれらは，3泊4日から4泊5日の日程でやってくるから，ひとり1日1万円かかるとしても，相当な金が県内に落ちることになる。県が力を入れるのも無理はない。

年5000羽が巣立つキジのふるさと

伊豆急線河津駅から北へ5キロ。河津筏場にキジの養殖場がある。河津川渓谷沿いの山の斜面，約6000平方メートルに雉舎の網が張りめぐらされ，〝伊豆の踊子〟たちが湯ガ野から下田へ山越えしたという道が，すぐ頭上に望まれる。岩に砕ける水の音があたりの静けさを誘い，そのなかに，ときおりキジの声がとどろく。ここは，年間5000羽ものキジが巣立っていく，まさに〝キジのふるさと〟である。静岡県一を誇るこのキジ大養殖場を経営するのは，相馬明吉さん，45歳。

「むかしは裏山にもキジやヤマドリがたくさんいました。畑仕事を終えて，夕方ちよっと鉄砲をもって山にはいりゃあ，2，3羽はすぐとれたものです。それが昭和25年ごろからめっきり少なくなりましてね」

相馬さんは，むかしを思いだす。

当時，かれは，山の斜面を耕して農業を営んでいた。また，家が代々の山持ちだったので，山歩きをしながらキジに接する機会も多く，キジに対して少なからぬ愛着も抱いていた。そうしたある日，近くに住むお百姓さんから，観賞用のすばらしいキジのつがいをもらってきた。15年前にもなる。

その2羽のキジをたいせつに飼っていたところ，翌年の春7個の卵を産んだ。チャボに抱かさせたところ，みごと全部が孵化。まだ，キジでもうけようなどという気はもうとうないから，2，3か月育てて山に放してやった。同じようなことが数年続いた。

そのうち，賀茂郡の猟友会で猟鳥としてのキジの減少が問題になってきた。

「うちの下田管轄はキジをとる数がふえている。このままでいたら，伊豆の山々にはキジがいなくなってしまう。なんとか養殖してキジをふやさねば……」

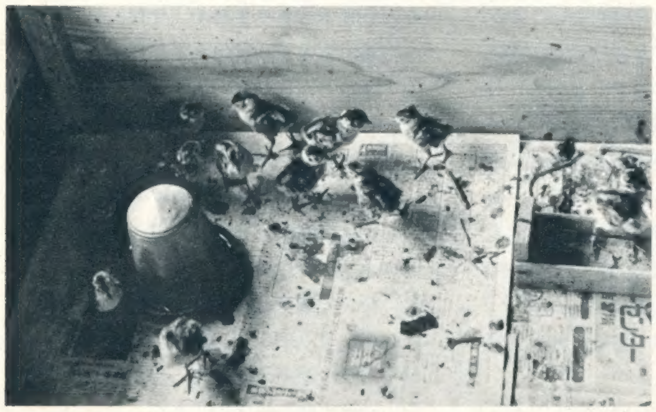
当時，賀茂郡猟友会の会長をしていた正木治郎氏は，賀茂郡独自でキジの放鳥を行なうことを提案し，メンバーもそれに賛同した。1961年のことである。しかし，放鳥するにはまずキジを生産しなければならない。日ごろから，キジの自慢話に花を咲かせていた相馬さんが，にわかに注目されることになった。正木氏の大きな励ましがあって，相馬さんは，これまでペットに飼っていたキジを種鳥とし，売るためのキジの本格的な養殖にとりかかる。

1970年を過ぎるころ，やっと1000羽を生産できるようになった。そして5000羽。広島県，鳥取県，神奈川県へも送りこむことができるようになった。ここまでには，相馬さんの並々ならぬ苦労があるのだが，その苦労のかいあって，今では経済的にもりっぱにやっていけるようになった。

ここで生産される5000羽のうち，約3000羽は，自然保護区，休猟区に放鳥する90日びな。残り2000羽は有料猟場へ出荷する120～180日たった成鳥。90日びなは2000円，成鳥は2500～3500円。え

養殖キジの成長

孵化して4日め。赤外線燈，薬も備えつけてある。





生後20日。この育雛室の中で，約30日間育てられる。



生後40日。雌雄の区別もはっきりしてくる。

さ代は生まれてから90日までは1日1羽3円，90日からは5円というから，年間差引きざっと計算しても1000万円ものオカネがころがりこむ。現在全国に700か所のキジの養殖場があるが，これだけ大規模なものは少ない。でもかれはいう。

「好きでなくっちゃできる仕事じゃありません」

相馬さんは今，ヤマドリの養殖に熱中している。気が荒らく，養殖がほとんど不可能だといわれていたヤマドリだが，相馬さんによって現在年間100羽まで生産できるようになった。この緑おりなす地に，やがて〝ヤマドリのふるさと〟が生まれるかもしれない。

ヒトも及ばぬキジの母性愛

山野のキジは，4月ともなれば恋をする。雄どうしは，あちらこちらで，雌をめぐって激しい〝恋の鞘当て〟を繰りひろげる。鋭いくちばしでつつき合い，長い足はキックボクサーまがいにのび，光る羽毛が風に舞う。このような光景がしばらく続く。そして，王座についた雄は，その地域の雌をすべて支配する。――といっても，その数だいたい3～5羽。戦い敗れた残りの雄たちは，雌に近寄ることもできず，嫁捜しの旅に出る。

覇者の雄は，居並ぶ雌をつき従え，次次に心を移しながら，わがもの顔にのし歩く。やがて雌たちは，それぞれ6～12個の卵を抱きはじめる。

日本の国鳥（1947年指定）だけあって，さすがヤマトナデシコ。雌の態度がしおらしい。〝浮気な旦那〟をもちながら，文句ひとつこぼさずに，せっせせっせと育児に励み，孵化率は100パーセント。その母性愛たるや，人間さまも及ぶまい。〝焼野のきぎす（キジ）〟とあるように，たとえ火のなか水のなか，わが子のためなら死をもいとわぬといわれる。

「朝，山で草を刈っていたら，キジの首がポトリと目の前に落ちた。よく見ると，まだ体温冷めやらぬ，首なしの母キジの胸に，幼いひなが目をパチクリ」

そこいらにいくらでもころがっている，キジにまつわる話である。

「いや驚きました。キジとヤマカカシの格闘です。ヤマカカシの頭は，とうとうキジのくちばしに砕かれましてね……」

俳人芭蕉も詠っている。

〝蛇食ふと聞けば恐ろし雉子の声〟

野生味のない養殖キジ

ところが，養殖キジになるとちょっと勝手が違ってくる。網を張ったケージの中で，いや応なしにお嫁さんを当てがわれ，もうこうなると，すきだのきらいだのといってはおれない。要するに〝受精卵製造アシスタント〟。ヒトさまの手にかかっては，さすがのキジも思うまま。すべてがグッと人間くさくなってくる。

キジには，〝産卵補充性〟という性質がある。産んだ卵を片っ端からとりあげてしまうと，3日に2個の割合でどんどん産みつづける。ふつう，年に1羽で40～50個。なかにはすごいやつもいて，70～80個を産むというからビックリ。産卵期間は，4月10日前後が産みはじめで，産み終わるのは7月上旬。

だが，そこは抜けめのない人間のこと。点燈飼育といって，電燈を使ってキジをだます。毎日少しずつ（約30分）日照時間を長くしていくと，生殖腺が刺激されて発情が早まり，約1か月早く産みはじめる。この方法はキジにかぎらず，正月にウグイスを鳴かせたり，春にキクの花を咲かせたりするのと同じような方法である。

雄にしても，雌のために血を流して戦う必要がない。じっとしていても，4，5羽は必ずあてがわれる。雄1羽に対して，雌4，5羽というのがもっとも平均的な比率。しかし，東京農業試験場五日市分場のように，1対15という例もある。当試験場の樋口靖男技師はいう。

「ことし，はじめて1対15というのをやってみたのです。キジの雄がいくら〝精力家〟で有名でも，悲鳴をあげるのではないかと思っていたのですが，受精率88パーセントでまずまず成功です」

雄1羽で少なくとも150個，多いときは650個もの受精卵を製造することになるのだから，これもまた驚き。



放飼場での飛翔訓練によって，徐々に野生化する。

人間が卵をとりあげるからというので，別にやけくそになったわけでもないだろうが，養殖キジは〝食卵性〟が非常に強い。自分で産んだ卵を次から次に食べてしまう。だから，産卵期のキジには，〝スペクター〟という矯正眼鏡をつけ，すぐ目の前が見えないようにして食卵を防ぐ。

産みおとされた卵は，チャボやニワトリに抱かせ，大がかりになると孵卵器に入れてあたためられる。標準温度は38.5度。約24日でうぶ声をあげる。孵化の確率は80パーセント。

ひなは育雛器に入れて育て，病気にならぬように，赤外線燈や薬も備えつけられる。30日たつと，鳥小屋（育雛室）に移される。

「キジがこんなに残忍だとは，最初思ってもみませんでした。小屋のなかで，たがいにすごい喧嘩をはじめるんです。背中の羽つつき。尻の羽つつき。羽毛はむしりとられる。やがて肉が見え，血がしたたりはじめる。今度はみなで寄ってたかって血だるま。尻の穴から腸をベロンとたらして息も絶えだえに逃げまどう。隔離病棟が必要になるんです」

樋口さんによれば，この習性は〝カンニバリズム（食羽食血癖）〟というのだそうだ。広さが限られた小屋のなかで，鳥の密度が高くなるとやりはじめる。天候にも関係し，日光の刺激が強すぎたり，蒸し暑かったり，天気が不順でストレスがたまったときなどにも起こる。また，えさにも左右され，たんぱく質が多すぎても少なすぎてもダメ。しかし現在のところ，はっきりした原因はまだつかめていないという。

こうして，鳥小屋でさらに30日育てられると，キジはすっかりたくましくなる。しかし，いくら元気でも，屋根つき，えさつきのいわば温室育ち。部屋も狭いため，満足な羽ばたきひとつできない。このままの状態で山野に放たれても，雨にたたかれ風にさらされ，猛禽類や野犬などにねらわれる。えさも満足にとれず，はては冷たく野たれ死に。

だから今度は，放飼場に移される。放飼場とは，手厚く育てあげたキジを野生化させるための訓練場。草や木がおい茂り，そまつな雨よけだけのある，広い，網で囲まれたなかで，やがてくる自由の日に備え，ひたすら生活訓練に励む。

しかし，やっぱり人工キジ。そこまで力を尽くしても，野生化ははなはだおぼつかない。放鳥したもので，実際元気に越冬し，生きつづけるのは20～30パーセントという。

キジは力強く羽ばたいて

去る8月8日。相馬さんが手塩にかけて育ててきた90日びな100羽が，自然の山野に旅立っていった。

その日，相馬さんの家は，朝早くからあわただしかった。なにしろ，ことしはじめて，キジを手離すのである。朝露に濡れたカヤをかき分け，最後のえさをまいてやる相馬さんの後ろ姿は，なぜかさみしそう。えさをじゅうぶん食べさせると，駆けつけた，下田林業事務所猟政担当の藤井松年氏ら2人も手伝って，1羽1羽キジを捕えタケで編んだかごの中に10羽ずつ閉じこめる。キジたちは，やがて自由になる身とも知らず，大声をあげて逃げまどう。100羽全部をかごに入れてトラックに積みこみ，一路南伊豆へ。

青野休猟区――南伊豆海岸に注ぐ青野川の上流5キロ，ことしの11月に新しく休猟区に指定される，面積96ヘクタールの国有林である。台風一過の快晴。ギラつく夏の太陽につばさを輝かせて，元気に飛びたっていった。

藤井氏は願いをこめるようにいう。

「全部とはいわないが，せめて80羽でも無事に育ってくれれば……。ここは雑木が多いし，水もきれいで豊富だし，放鳥には最適の場所ですからね。休猟区開けの3年後には，きっと元気な姿を見せてくれるでしょう」

かたわらで，この放鳥を見学していた青年がつぶやいた。

「だいじょうぶかな。ここの上流には廃鉱があって，カドミウムで汚染されているというんだが……」

自由の天地に舞いたつキジ。たとえ風雨に耐え，公害に耐えて，大自然に生きる力を体得したとしても，はかない生命。3年後には，精巧な猟銃を携えたハンターたちが待ち受けているのだ。キジがいくら力強く羽ばたいても，舞い落ちたモミジ葉のように，赤い血は大地を染めることだろう。しかし，それもしかたがないことなのか。かれらは〝撃つために育てられたキジ〟なのだから……。■

（八尋記者）



生後60日。えさをやると寄ってくる。放鳥にはまだまだ。



生後90日。放飼場での野生化も進み，翌日放鳥された。

ヒグマと２人のイノシシ　79　畑　正憲



雪の島から　1

拝啓

この間は有り難う。奥さんから手あみのマフラーをいただき、いつもながらのお心づかい、深く感謝しています。家の中で着用しています。

また、冬眠の文献類、わがままを言ってすまなかった。決定的なものはないとわかっていたものの、あるいはと思ったりして、お手をわずらわせてしまいました。どうも有り難う。

どうかな、東京は冬らしくなったかな。灰色の空気、灰色のビル。その中で年々薄着の習慣を身につけていたのだけど、こちらはドーンと寒くなった。ステテコでは間に合わず、厚手のもも引きを着用し、その上に綿入りの漁師ズボンをはいている。痛快な寒さだ。

妻や娘についてご心配をいただいたけれど、もともと雑草だ、ピンピンしている。特に妻が強くなったのは驚異だ。あの細い体で、吹雪の日に馬の世話をするのだから。

子供の方は予想通りだった。新しい環境にとけこみ、スキーをやったり、スケートをたのしんだりしているよ。処女雪にまみれて、結構面白いらしい。

さて、どんべえのことだが、君もびっくりしたらしいな。学問的な仕事にせよという君のご指摘、観察の不備をつく忠告、いろいろと耳の痛いところもあった。それから、春以来、君が行間で聞きたそうにしていることにも、僕は答えずじまいだった――

余裕がなくてね。数々の非礼、許して下さい。

時間じゃない、余裕がなかったのだ。最近僕の紹介記事などでは、売れっ子で書きまくっているなどと記されているけれど、とてもとても、僕には才がなく、書きまくるところまで行っていない。執筆量なら、いわゆる売れっ子と言われる人の10分の１程度だ。

これはいけないことだと僕は反省しているさ。文章で身を立てているのなら、たくさん書くのは恥じゃない。いつか機会があったら、僕は１日に1000枚ずつ書き暮らしてみたいよ。そうなったら収入も多くなるだろうから、君と一杯飲める。

というわけで、時間はたっぷりあったのだが、動物の新顔が続々と現われたり、どんべえが駄々をこねたりして、紙に向かうゆとりがなかったのだ。君のことだから、事情は察してくれるだろうが。

冬眠の件，観察がずさんだったのは，反省している。油断だった。

君はやっと叱ってくれたね。

「お前は常日頃動物学者ではないなどとイキガリ過ぎる。動物学者だろうと作家だろうと，真実を見究める作業には変わりはないはずだ」

耳が痛いな。

本当に冬眠については，もっとくわしく知りたいよ。実験も続けなければならない。おれ……やりたいと思う。

でもねえ，君ならわかると思うけど，僕は学者向きじゃないんだ。それはお手伝いはしたいと常々考えてるさ。しかし自分でデータをとる気にはなれない。

この奇妙な意固地，どう言えばいいのかなあ。

一緒に冬眠して，体温を計るね。データがでるよな。その数値より，僕には一緒に寝ることの方が魅力的なんだ。

その辺で妙に片意地のところがあり，つまらぬこだわりだと思っているさ。けれども，僕自身が生きて行くっていうことには，ある程度かかわりを持ってくると信じているので，当分はこのまま生活を続ける心算だ。

若い学者がそばにいてくれたら……とはいつも残念に思っている。欲しいよ，人材が。

いつの頃からか僕は変な人気者になり，助手にさせてくれという手紙をたくさん貰うようになった。しかし，多い時には日に５通も６通もくるその手紙類の中でただの１通も，こちらの希望にピタリとそうものがないのだ。

これは僕もいけなかった。僕の態度を明確にしないで待ったって，手紙を下さる方でも，一体どう申しこんだらいいのかわからないわけだ。

僕はもっと積極的でなければならなかったと，やっと気がついたよ。いろいろなことが一段落したら，新聞に広告を出して，学者志望者を公募しようと決心している。

さて，油断の話だがね，こういう種々の想いがからまりあっているので，まあ聞いてくれ。雪の島からの夢想を。

正直に言って，僕はヒグマのことが，これだけ未知だとは考えてもみなかった。諸先輩のいろいろな本があるし，たとえば犬飼さんの動物記だって，手にした夜は眠られぬ位だった。

けれども，実際に着手してみると，冬眠の実態はてんで調べられていないし，出産の場面だって，見た人はいないそうだ。また，冬眠中のグラジュアルな体重の変化についても，しっかりした仕事はないんだ。

一体，これまで研究があったのかね。何をどうやっていたのだろうね。

このお粗末な状態で，いざヒグマ問題をどうするかとなると，専門家らしき人が登場し，ヒグマの運命にかなりかかわってくる意見を吐くだろうしな，おそろしいな。北海道に生息するヒグマの推定頭数だって，いい加減だぜ。僕は3000頭だとするその根拠に関するくだりを何度も読んだが，さっぱりわからなかった。

おれ，チームを作るよ。自分自身はクマとすもうを取っていたとしても，自然を立体的に理解するために，いくつか他の目を導入するよ。

人が多ければ，冬眠室だって，あんなそっけない設計はしなかったさ。入り口があって，観察室が３個あるだけというのでは，いくらなんでも簡単すぎる。もっと有用な，多目的な部屋を作るべきだった。……

部屋の底は，鉄板にして，鉄板はそのまま計量器であるべきだ。上にクマが乗ったら，目方が自動的に記録されるのが望ましい。

こうしておけば，12月に何グラム，１月に何グラム体重の変化があったか，たちどころにわかるわけだ。そして，その鉄板の上には，丈夫なゴムを張りつけシールドする必要がある。そうすれば，普通の睡眠時の脳波，冬眠時の脳波の違いがわかる。

知りたいよ，おれだって。

ヒグマはおそらく，冬眠をする動物の中で最も大きいはずだ。

それが，もし冬ごもりなどではなく，本当の冬眠だとしたら！

これはすごいことだよ。その価値は，君はオーバー過ぎるぐらいに認めてくれたね。

大動物が冬眠する生理的なしくみがわかったら，面白いな。ＳＦにも使えるし，第一，そのことだけで嬉しいよ。

人間に応用できるとずっとたのしくなるな。宇宙旅行とか医学的利用などとヤボなことを言う前に，僕は自分で眠ってみたいな。下腹が張り出した中年になったら，のこのことどんべえの居室に入っていって，

「はい，ごめんよ」

とか言って，その横でグースカ眠って暮らすなんて，いいな，理想だな。貧乏したり，デフレにでもなったら，一家揃って半年眠れば，家計も安上がりだしさ。

こうして，雪の島で勝手なことを考えていると，実現したいことがゴマンと浮かんでくるぞ。

僕は来年，更に戦線を拡大しようと思う。いや，来年じゃない。年が明けたのだから今年だが，自分の基本的な発想の基を確かにし，あらゆるものに区切りをつけ，一からやり直すつもりだ。

退屈だろうが，まあそれを聞いてくれ。■



雪が積もると，明日美ちゃんはスキーのとりこになった。
今日もイヌたちを引き連れてトレーニング。撮影　畑　三喜雄



コウライウグイス科 *Oriolidae*

スズメ目に属する1群で，28種からなる。大きさは，ムクドリ大からカケス大まであり，ユーラシア大陸南半分，アフリカ，マレー諸島，ニューギニア，オーストラリアに分布する。とくにマレー諸島(フィリピン諸島，大・小スンダ列島を含む）は，この科の半数の種を産し，そのうちの9種類がここの特産種である。コウライウグイス科はコウライウグイス類とクワドリ類に分けられ，後者はオーストラリア，ニューギニアの特産である。

コウライウグイス類は，全身があざやかな黄色で，頭の一部，つばさ，尾などが黒いタイプが典型で，アジア産のコウライウグイス，ヨーロッパ産のキガシラコウライウグイス，アフリカ産のアフリカズキンオリオール *Oriolus larvatus*などがこれに属する。また，東南アジアには，全身が黒色のスミゴロモ *O. hosii*，赤と黒のヒゴロモ *O. traillii*なども産する。

クワドリ属*Sphecotheres*は，目の周囲に赤い皮膚の露出した部分があり，頭部は黒，背面は緑色系，腹面は黄色系である。

この科の特徴は，くちばしがやや長く，先が多少湾曲し，つばさも長めで飛行力があることで，体型はムクドリに似ている。

熱帯産のものは熱帯降雨林にもすむが，ふつうは明るい林を好み，単独またはつがいで暮らしている。ほとんどいつも梢に近い茂みのなかにいるので，姿を見ることは少ないが，声はよくとおるので，所在はすぐに知れる。北方産のものは冬，南方へ渡るが，熱帯産のは留鳥（りゅうちょう）である。他の鳥がきらう毛虫をよく食べることで知られている。

キガシラコウライウグイス（雄）。
コウライウグイス科コウライウグイス属。
日ざしに照りはえる金色の羽毛。
ものみな暑さに静まりかえる夏の盛りにも
この華麗な姿を見よ！ とばかりさえずり続ける。
PH. M. BROSSELIN-JACANA





キガシラコウライウグイスの分布。
ヨーロッパから
アジア中・南部，北アフリカにかけて繁殖し
北部のものは，冬，アフリカに渡る。

キガシラコウライウグイス

Oriolus oriolus

キガシラコウライウグイスは，全長約21センチ，体重70～78グラムの色あざやかな鳥だ。この鳥の学名は，〝金色の〟という意味のラテン語 **aureolus** に由来しているが，実際，雄の成鳥のからだは全体にきらびやかな黄金色で，つばさや尾の黒とあざやかな対照をなしている。雌は背面が黄緑で，尾のつけ根は黄色みをおび，胸のところに縦斑があって，腹部は灰色である。

ヨーロッパからアジア中・南部，北アフリカにかけて繁殖し，北部のものは冬になるとアフリカに渡っていく。

キガシラコウライウグイスは，ほんらい平地の鳥で，標高500メートル以上のところにすみつくことはほとんどない。ただし，渡りのときには，非常に高い山岳地帯をとび越えることもできる。スイスのアルプスでは，標高4275メートルものところで死体が見つかったこともあるほどだ。

明るい森や公園，ポプラ並木，果樹園などがこの鳥のすみかだが，たえず茂みから茂みへと飛びまわり，同じ木に長い間とどまっていることが少ないので，人目につきにくい。地面におりてくることは少なく，せいぜい水を飲むときぐらいのものだ。単独性で，気が強く，繁殖期ともなれば，それに輪をかけたようにけんか好きになる。

この鳥のさえずりは，よく響く調子のよい笛のような音だ。フランスなどでは，この鳥がアフリカから渡ってくる5月になると，明けがたから昼にかけてや夕暮れどきに，高い鳴き声が森にこだましはじめる。このさえず

キガシラコウライウグイスは孤高の鳥。
繁殖期以外は，誇りも高く，ひとりで生きる。
だからきっと
ひなにえさをやっている姿など見られたくなくて
それで，そっぽを向いているのにちがいない。(上)
PH. MERLET–ATLAS PHOTO

りは，ほかの鳥たちが鳴かなくなる真夏の暑い盛りもつづく。

ハンモックのような巣

繁殖期になり，テリトリー（なわ張り）を定めるころになると，雄どうしのライバル争いは，ますます騒々しさを増してくる。他方，雄と雌のあいだでは，ひっきりなしに追いかけあいが続けられる。

キガシラコウライウグイスの巣は，ふつう地面から数メートルの高さにある木の横枝にかけられる。この巣は，深くくぼんだ椀状をしているが，枝の水平な分かれめにぶら下げるようにかかっているので，風が吹くと枝とともに揺れうごき，ちょうどハンモックかゆりかごのような感じだ。巣材はクモの糸，枯れ草，コケなどがおもで，内側には，草木の若芽や毛織物のくず，羽毛（うもう）などが敷きつめられている。巣づくりは，まず，寄せ集めた長いひも状のものを，唾液を混ぜながら，ささえとなる２本の水平な枝のまわりに，念入りにからみつかせていく。この仕事はほとんど雌だけで行ない，雄は補助的に働くだけだ。

６月のはじめ，雌はこのハンモックのような巣のなかに，白地に赤褐色の斑点をもった卵を4，5個産みつける。抱卵（ほうらん）も雌だけが行なう。

２週間ほどすると，ひながかえる。ハンモックのような巣は，風が吹くとひどく揺れるが，ひなは，生まれたときから巣の底にしっかりかじりついているので，外に放りだされたりはしない。ひなのえさは昆虫（こんちゅう）類やさくらんぼなど。両親は，かわいいわが子のためとあれば，かなり遠くまでえさ捜しに出かけることもある。捕食者が襲ってきても逃げたりせず，羽毛をふくらませ，ばたつかせて，必死にひなを守りとおす。

ひなは，16～17日で巣立ちするが，その後も家族は，ある期間いっしょに暮らす。

７月の終りになると，最初の渡りがはじまる。渡りは８月いっぱい続く。キガシラコウライウグイスは，ふつう夜間に旅をし，日中は移動の途中で見つけた森のなかで過ごす。渡りの途中，ギリシャの島々で休んで，ここのイチジクをたらふく食べ，エジプトやリビアに移ると，そこのナツメヤシの実で腹を満たし，10月には，越冬地のアフリカ東・南部地域にたどりつく。

他方，繁殖地を求めての春の渡りは，秋の渡りほど目だたない。いちばん多く渡っていくのはチュニジアだが，そこにかぎらず，広く北アフリカの地中海沿岸全域にやってくる。

コウライウグイス

Oriolus chinensis

ユーラシア大陸の東半分に，キガシラコウライウグイスと置きかわるように分布している。全長26センチで，前種によく似ているが，目から後頭部にいたる黒条がある。コウライウグイスという名まえは，「高麗（朝鮮の旧名）にいる声のいい鳥」というような意味で，日本のウグイスとはまったく縁の遠い種類である。中国東南部ではタケやぶやバンヤンの林にすんでおり，朝鮮でもふつうにいるが，日本には，春秋の渡りのとき，対馬などに少数がたち寄るにすぎない。

オウチュウ科　*Dicruridae*

アジア南部からオーストラリア，アフリカに分布するムクドリ大の鳥で，20種を数える。全身金属光沢のある黒色のものが多いが，なかには灰色のものや，腹面が白色のものもいる。くちばしは短く強力で，つばさは長く，飛行力がある。尾羽（おばね）も長く，やや深い凹尾だが，なかには外側尾羽が長くのび，その先端が外側に巻きあがっているものや，細い羽軸（うじく）だけの羽の先に大きな羽弁が開いて，まるで尾羽の両側にススキの穂をつけたような種類もある。また，額に冠羽（かんう）のあるものもある。

森林にも生息するが，村落や市街地でもよく見かけ，見晴らしのきくところにとまっていて，空中の昆虫を舞いあがって捕食する。気の強い鳥で，タカやカラスをも撃退する。

巣は林縁の高い枝先に，小枝，細根，草などをしっかりとからめて皿状につくられる。卵数は３，４個がふつうだが，もっと少ない種類もある。抱卵はおもに雌があたり，育雛（いくすう）は両親で行なう。

オウチュウ　*Dicrurus macrocercus*

台湾では，市街地の電線などによくとまっており，ごくふつうの鳥である。全長33センチ，全身黒色で長い凹尾をなし，目が赤い。空中の昆虫をとるほか，スイギュウの背に乗って寄生虫をとることもある。



サンショウクイ（雌とひな）。
サンショウクイ科サンショウクイ属。
クモの糸で，細い枝や根，草をからみ合わせ
地衣類や樹皮をはりつけた巣は
木のこぶのようで，人目をくらます。
撮影　木地章純



サンショウクイ科
Campephagidae

サンショウクイ科は，約70種の鳥からなるスズメ目のグループで，アフリカ，インドからオーストラリア，ニューギニア，スンダ列島，ソロモン群島，フィリピンにかけてと東アジアの温帯地域に分布している。

大きさはまちまちで，全長13センチのものから35センチのものまで，かなりの幅がある。くちばしはじょうぶなほうで，基部がいくぶん幅広く，先端がやや鉤形に曲がっている。あしは短く，つばさはとがっている。

この科の鳥は，ただ１種を除けばすべてが樹上生活者で，繁殖期以外は群れをなしていることが多く，昆虫や果実をえさにして暮らしている。大部分は留鳥だが，サンショウクイのように比較的北方に分布するものは，渡りをする。

ヒイロサンショウクイ
Pericrocotus flammeus

ヒイロサンショウクイは，全長15～20センチ，オレンジ色と黒の対照があざやかな羽毛，長い尾をもったスマートな鳥だ。頭部とのど，背，中央の尾羽が光沢のある藍黒色で，下面や尻，つばさの一部がオレンジ色になっている。ただし，雌はずっと輝きが弱く，全体に黄色みをおびたくすんだ灰色をしている。

インドの大部分，ビルマ，中国南部に分布し，標高2500メートルまでの森のなかで暮らしている。この科の鳥すべてに共通することだが，20羽ほどの群れをなしていることが多く，１日じゅう，昆虫を求めて枝から枝へ飛びわたり，樹皮や花や木の葉をつついている。この鳥が森林を離れ，開けたところを飛ぶのは珍しく，地面におりることもまずない。さえずりはとぎれることがなく，響きもよい。



ヒイロサンショウクイ（左・雄，右・雌）。
サンショウクイ科サンショウクイ属。
――おい，俺のほうがきれいな姿だからといって
ふてくされて横向くことないじゃないか！
――何さ！　えさを捜してるだけよ！（下）
PH. ROTH

巣は，ふつう高さ３～12メートルの木のてっぺんにつくられる。小さな椀型で，外側は地衣類やコケ，細い木の根などが念入りに組みあわされており，内側はクモの糸でおおわれている。１腹の卵数は3，4個。ピンク色か海緑色で，濃褐色の斑点がついている。

この鳥は，非常にデリケートで扱いにくいが，中国では飼い鳥として珍重されている。

サンショウクイ
Pericrocotus roseus

サンショウクイは，日本でも見かけられるサンショウクイ属の鳥。全長約20センチで，姿はモズと似ているが，それよりほっそりとしていて，尾は長い。背面とつばさは薄い灰色で，腹部は白く，全体にじみな印象をうける。雄の頭上は黒く，額の部分は広く白いが，雌では，頭上も灰色で，額の白色部も狭い。

アムール川流域から中国東北部，朝鮮，日本，台湾にかけて繁殖し，冬は東南アジアに渡っていく。日本では夏鳥（なつどり）として，北海道を除く全国で見られる。

サンショウクイ科のごたぶんにもれず，この鳥も低山帯の梢で暮らしており，高い木の頂にとまっていることが多い。そのため，上空から「ヒリヒリッ，ヒリヒリッ」と鈴を振るような特色のある鳴き声が聞こえることはあっても，その姿を見かけることはめったにない。繁殖その他の習性は，ヒイロサンショウクイとよく似ている。

山椒は小粒でもヒリリとからい。
サンショウクイは梢でヒリリとさえずる。
森の樹上高くて生活するから
涼しげなその鳴き声を聞くことはあっても
姿はめったにお目にかかれない。（上）
撮影　木地草枝



ツバメ科　*Hirundinidae*

ツバメ科の鳥は，両極圏と大洋上に浮かぶ島々を除き，世界じゅうに広く分布し，日本にはツバメ，ミナミツバメ *Hirundo tahitica*，コシアカツバメ，イワツバメ，ショウドウツバメの５種が繁殖している。

20属75～79種に分類されているこの科の鳥は，すべて，日本のツバメに見るように，スズメ目の鳥としてはもっとも空中生活に適応しており，すいすいと身軽に飛びまわりながら，空中に浮遊する各種の小型昆虫類を捕食して生きている。

この採食方法と関連して，形態上にいくつかの特徴が見られる。翼長はからだの大きさの割りに長く，外側の初列風切羽（しょれつかざきりばね）はよくのびていて，つばさの先端がとがっている。体型はほっそりしている。くちばしは扁平で短く，口は深く裂けていて大きく開くことができる。あしは採食行動にはまったく使わないことや，その営巣（えいそう）場所，営巣行動とも関係して，からだの割りに短く，つめは比較的鋭い。

アマツバメとの違い

ところで，ツバメ科の鳥とよく似た姿，同じような生活様式をもつ鳥にアマツバメ類があり，両者はしばしば混同される。しかし，これはアマツバメ目に属し，スズメ目に属するツバメ類とは類縁が遠い。アマツバメ類は，非常に鋭いつめをもち，その握力も非常に強いので，垂直の面にあるごく小さな突出部にこのつめをひっかけるようにして，とりついてとまる。また，ツバメ科の鳥以上に空中生活に適応していて，からだの割合上さらにつばさが長く，あしが短いので，平坦な面からでは容易に舞いあがれず，このため，平坦なところにはまったくおりない。

一方，ツバメ科の鳥は，やはりあしは短く，つめもかなり鋭いので垂直面上の小突出部分にとまることもできるが，さらに，電線や屋根の上，枝先にもとまれるばかりか，平坦な地上におりて歩くこともできる。

全長は約９～23センチ。羽毛は一般に雌雄同色で，黒，灰色，赤褐色，白などとじみである。しかし，青紫色や緑色の美しい金属光沢のある羽毛をもつものも少なくない。尾は長いものでは，そのいちばん外側の尾羽がとくに細長くのびていて，いわゆる燕尾となっており，中程度のものは凹型の尾をしている。

大部分の種類は，集団性あるいは半集団性繁殖行動をとる。営巣様式には，①地上におりて湿ったどろを集め，それを唾液と混ぜて固め，天然の岩壁や建物の天井，壁などに巣をかけるもの，②川の堤や丘陵にある砂分の多い土砂が露出している斜面や，乾期に水が干上がった平坦な川床などに穴をうがって営巣するもの，③天然の樹洞やキツツキ類の穴などに営巣し，巣箱もよく利用するもの，の３つのタイプがある。中高緯度地域で繁殖するものは，暖・熱帯地方に渡って越冬する。

水浴びのしかたは，多くの小鳥類とは異なり，飛びながら水面に繰り返し飛びこんだり，雨のなかを飛んですませている。ツバメ，コシアカツバメ，イワツバメでは巣材のどろを集めるため地上におりているときに，よく交尾をする。非繁殖期には集団で就塒〔ねぐらにつくこと〕するものもある。

ツバメ，ツバメ科ツバメ属。
流線型のからだ，細長いつばさ，短いあし。
空中生活がもたらした機能美の極地。

PH BILLE



巣材にもえさにも乏しい大都会での生活
小さな巣からあふれんばかりのひなを前に
親ツバメはヤケクソぎみ
さあ、食え！ とばかりに、えさを押しこんだ
（東京都世田谷区にて）

撮影 伊藤信男

ツバメ *Hirundo rustica*

ツバメぐらい日本人に保護されてきた鳥はほかにない。日本では、秋になるとシベリア大陸から群れをなして渡ってくる多くの種類の小鳥たちを霞網（かすみあみ）をしかけて捕え、自然の恵みと感じて賞味する慣習がひろまっていた。しかも、25年前までこの行為は法律上も認められてきた。それなのに、この事実とは対照的に、なぜツバメだけが、こうも保護されてきたのだろうか。その答えは簡単だ。

ツバメは、日本国じゅういたるところの人家の軒下に巣をかけ、水田のうえを飛びまわって稲作に有害な昆虫類を駆除してくれるたいへんありがたい鳥だと信じられ、教えられてきたからである。森や林にすむほとんどすべての鳥も、多かれ少なかれ、やはり昆虫類を食べて生きているのだから、ツバメだけが保護される理由はほんとうはないのだが……

現在はどうだろうか。欧米諸国で始まった農薬重視の風潮をそのまま模倣し、無差別に生物を殺し、薬物で汚染された作物をつくっていたのだから、ツバメの姿がむかしにくらべ少なくなるのは当然である。また、採食場所も少なく、巣材のどろを集めるところも少ない大都市のなかにツバメを見ないのも、これまたあたりまえのことだろう。ツバメを捕えて焼鳥にしていた男が捕えられたというニュースが報道されたことがあったが、この男だけでなく、現在の都会育ちの日本の子どもの多くは、ツバメすら知らない。

ツバメはユーラシア大陸中高緯度地帯のほぼ全域、アフリカ大陸の北部およびアラスカからメキシコにかけての北アメリカ大陸の大部分に繁殖分布している。冬期は、その大部分のものはアフリカ、南アジア、南アメリカなどの暖・熱帯地域に渡って越冬している。日本では、本州中部以南の暖地には、ツバメが越冬する場所が何か所もあり、なかでも浜名湖のものは古くから有名である。

全長は15～19センチ、額は赤褐色で上背面は光沢のある藍黒色、尾は典型的な燕尾型で雄のほうが雌より長い。下面の羽色（うしょく）には、亜種によって相異が見られる。日本のものでは、のどが赤褐色で胸に藍黒色の細い横帯があり、胸腹部は白色という個体がいちばん多く、胸腹部や下尾筒部分が淡褐色をおびる個体（または亜種＝沿海州南部、中国北部に繁殖分布する一亜種アカハラツバメのこと）も見られる。ヨーロッパ西部の亜種では上胸の藍黒色横帯以下が淡桃赤褐色、北アメリカの亜種では上胸の藍黒色横帯は胸の中央で切れ、のど、胸、腹は濃い赤褐色である。

ツバメ科の鳥は、群れをなして昼間に渡りをする性質がある。かれらは渡りの途中も、飛びながら空中の小昆虫類を捕えて移動していくので、長距離の渡りをする多くの小鳥類に見られるように、渡りにさきがけて体脂肪を蓄積する必要はない。

春の訪れを告げる鳥

ある地域で定期的に鳥の観察を続け、その地域に渡り鳥が最初に姿を見せた日を初認日と呼んでいるが、ツバメは、むかしから日本人に親しまれ、飛ぶ姿が目につきやすく、種類の識別も比較的やさしいので、日本各地で

春の初認日の資料が集められている。春，いちばん早くツバメが出現するのは，もちろん越冬地に近い西南諸島で2月上・中旬，九州南部で2月下旬～3月上旬，九州北部から近畿地方では3月中・下旬，東海・関東地方は3月下旬～4月上旬，そして北海道には4月中・下旬と，南西から北東にのびる日本列島を少しずつ北上していく。このため，モンシロチョウの初認日，サクラの開花状況などとともに，このツバメの初認日は生物暦として使われている。ツバメの春の初認日は，かれらの食物である昆虫類の出現状態と関係しているので，その年の気候状態をよく反映することもあり，年によって多少違っている。

現在では，世界各地で繁殖するツバメは，ほとんど人間がつくった建築物に営巣している。その状態から推察すると，地球上に人間が出現し，のちにかれらが建築物を利用するようになる以前は，おそらく，海岸や川岸，山中などに点在する急な傾斜をなした岩場や洞窟などの岩壁に集団営巣していたものと思われる。街路に沿った人家の軒下に，点々と間隔をおいて営巣しているような場合には，それぞれ営巣場所を中心とした弱いテリトリー性を示して繁殖している。巣づくりは，雌雄ともに行なう。川べや水田，路傍のちょっとした水たまりなど，じゅうぶんに湿ったどろのあるところに舞いおりて，そのどろをくちばしで集め，それに地上で採集した枯れ草と唾液を混ぜて，がっちりした巣をつくる。この巣材の混ぜ方は，木造建築をつくる際に，壁土に切りわらを入れて混ぜあわせるやり方――もっとも，今ではあまり見られなくなったが――によく似ている。

巣は多くの場合，垂直の面にかけられるが，わずかな垂直のささえを手がかりにして軒下にある照明燈の笠の上などにつくられることもまれではない。できあがりの巣の形は，お椀を縦に割って，その断面を壁などの垂直面にくっつけた形のもので，巣の上方が開けている。一方，コシアカツバメ，イワツバメ，ショウドウツバメの巣は，それぞれ独特の形をしていて，ツバメの巣とも異なっている。

しかし，ツバメ以外の3種の巣に共通していることは，いずれもその巣の口からさし込む光線が産座にある卵に直接とどかない構造にできている点である。このような巣の構造や営巣場所の特徴とも関連して，この3種の卵は斑紋のない白色で，産座が薄暗い構造の巣をつくる鳥の卵に見られる傾向のひとつをよく示している（ただし，コシアカツバメには，微小な褐色斑が散在するものもある）。

一方，ツバメの卵は，上に開けた椀型の巣を





春の訪れを告げ，秋の到来を知らせる風物詩，
電線にぎっしりと並ぶツバメの姿も
ちかごろでは
めったに見かけられなくなってしまった。



つくる他の多くの種類の鳥類にも見られる。白色あるいはごく淡い褐色の地色に、赤褐色や紫褐色の斑紋がたくさん散りばめられたタイプの卵である。

1腹の卵数は3～7個、ふつうは4～6個で、孵化日数はふつう13～15日、抱卵はおもに雌が行なう。雄も抱卵することがあるが、雄には抱卵斑はできない。孵化から巣立ちまでは、多くの場合20～23日、1腹のひなが2日にわたって、別々に巣立ちすることもよくある。条件が許せば、春から夏にかけて2回繁殖する。繁殖を終えた成鳥とその年生まれの若鳥たちは、7月末ころから川原や湖沼にある広いヨシ原に集まって就塒するようになり、場所によっては何千、何万羽の大集団ねぐらが形成される。夕方、ねぐらの上空に到着したツバメたちは、しばらくの間はその上空を旋回し、夕闇をとおして鳥の飛ぶ姿がやっと見えるころにヨシ原に舞いおり、ヨシにとまって眠りにつく。このような集団ねぐらは、ツバメたちが秋になって南方に渡り終えるまで見られる。また、越冬中のツバメもヨシ原や屋内で集団で就塒している。

なお、ミナミツバメはツバメに近縁の種だが、下面は赤褐色で、胸にはツバメにあるような藍黒色の横帯がなく、尾はうんと短い。奄美大島以南の琉球列島に少数が繁殖し、ツバメに似た巣をつくり、卵は灰白色の地色に褐色、灰紫色の斑が密にある。

コシアカツバメ *Hirundo daurica*

コシアカツバメは、つばさと尾の形はツバメと同じで、全長約17～20センチ、ツバメよりひとまわり大きい。上背面は藍黒色、腰の部分は赤褐色でよく目だち、下面は淡黄褐色の地色に黒褐色の縦斑が密にあり、ツバメとは羽色がたいへん異なっている。ウスリー、南部アムール、バイカル湖西南域、朝鮮、中国全域、台湾、マレー半島、ジャワ、小スンダ列島、インド、セイロン、ヨーロッパ南部、アフリカなどに繁殖している。日本では、本州中部以北よりは以南のほうに生息数が多く、本州の北部では繁殖していない。

この鳥の春の渡来期は、ツバメより1～数週間おそく、秋はツバメよりおそくまで日本にとどまっている。また、本州中部以南の暖地には、少数が残留して越冬している。この鳥が繁殖しているかどうかを確かめるうえでいちばん確実な手がかりは、その独特の形をした巣を捜すことである。ツバメと同様に、本来は岩壁や洞穴などに営巣していたものと考えられるが、日本ではツバメと同じように、いまではすべて人間の建築物に営巣している。天井と壁が直角になっているところに、ツバメの巣よりはるかに大きく、やはり外側はどろで塗った巣をかける。その巣の形は、口の長い一升徳利か花瓶を縦に割って、その断面部を天井に、底の部分を垂直の面にくっつけたような形につくられている。巣の口は、狭くてトンネル状に細長い場合が多いが、どろが少ない場合にはトンネル部分はほとんど省略されることもあり、またひなが大きくなり内部で活発に動きだすと、トンネル部分はよくくずれ落ちてしまう。巣の形が上述のようなものなので、産卵された卵やひなは調べにくく、この鳥の繁殖生態は、まだくわしく調べられていない。密な集団をなして営巣する傾向は、ツバメより強く、数個の巣がくっつき、同時に数つがいがそこで繁殖していることも少なくないが、それでもイワツバメほど密な集団営巣は行なわない。抱卵は雌雄ともが行ない、おそらく、孵化から巣立ちまでの日数はツバメより数日長いものと推察される。コシアカツバメは、ツバメのように夏から秋にかけて集団で就塒することはなく、幼鳥は巣立ち後も、どこかの巣にもどって眠るし、成鳥も巣内で寝る性質がある。越冬中のものも、やはり巣にはいって寝ている。

巣の構造からして、ツバメなら巣をかけられる木造建築物の軒下のようなところでも巣をかけられない場合が多く、木造モルタル式の建物やコンクリートの建物によく巣をかけている。日本各地で見られる建築物の改築にともない、この鳥の営巣適所も増加する傾向にあるから、新しい繁殖地が出現するとも考えられる。また、ヨーロッパにおける繁殖分布域は北上する傾向がみられる。

コシアカツバメ：ツバメ科ツバメ属
赤い腰巻きくるりと巻いて
コシアカツバメは何捜す？
トックリ型のマイホーム
仕上げるためのどろ集め。（上
撮影　安部直哉

ゆらゆら揺れるハンモックのような巣で
生まれたときからもまれ続ける
キカシラコウライウグイスのひなたち。
行く手に待ちうける人生の荒波も
きっと、うまく乗りきっていくことだろう。（右）
PH. L. GAGGERO

ツバメの育雛
粘土とわらでできたじょうぶな巣。
だれもが軒下でいちどは見たことのある
このほほえましい情景も、わたしたちの前から
失われつつある。（83—10、11
PH. L. GAGGERO











ショウドウツバメ *Riparia riparia*



ショウドウツバメはイワツバメと同じ体型で、尾も凹型だが、イワツバメよりさらに小さく全長約12～13センチ。上背面はくすんだような褐色、下面は汚白色で胸に淡褐色の横帯がある。この鳥もユーラシア大陸と北アフリカに広く繁殖し、また北部アメリカでも繁殖している。水辺に近い丘陵で、砂分の多い土砂が露出した急斜面に穴をうがって集団営巣（えいそう）する。また、道路を拡張するために丘をけずった跡や砂掘り場の跡など、営巣に適した場所にはすぐすみつく。このような崖面の、指で軽くつつくと砂がさらさらとくずれ落ちるような柔らかい部分に、直径４～６センチのトンネルを約70センチほど掘りすすみ、その奥を産座にしている。１腹卵数は５，６個。抱卵（ほうらん）日数は約14日で、それから15～20日後に巣立ちする。巣立ち後まもない若鳥はコロニー（集団営巣地のどこかの巣穴にはいって眠る。繁殖を終わった成鳥とその年生まれの若鳥は、集団でヨシ原などで就塒する。

今まで日本で繁殖が確かめられているのは、北海道だけであり、その生息数も決して多くはないが、秋の渡りの時期には本州の海岸の砂州や海岸近くの市街地の上空にもふつうに姿を見せる。

さあ行くぞ！　出発！
長いつばさをいっぱいに開き
えさを求めて，ツバメは今日も
広い世界に羽ばたいていく。（左
PH. W. CURTH-ARDEA

崖に掘られた穴また穴は
ショウドウツバメのアパートだ
１ＤＫの奥深い部屋だが
コンクリートに塗りこめられた人間のやつと違い
手づくりのよさがあるのだ（上
PH. BILLE

ショウドウツバメ，ツバメ科ショウドウツバメ属
— おまえたち，奥の部屋にはいっていなさい
生まれたばかりで，世の中のことは
まだわからないだろうが
２本足のこわーい猛獣がいるんだよ。（下
PH. S. DALTON-N.H.P.A.

イワツバメ *Delichon urbica*



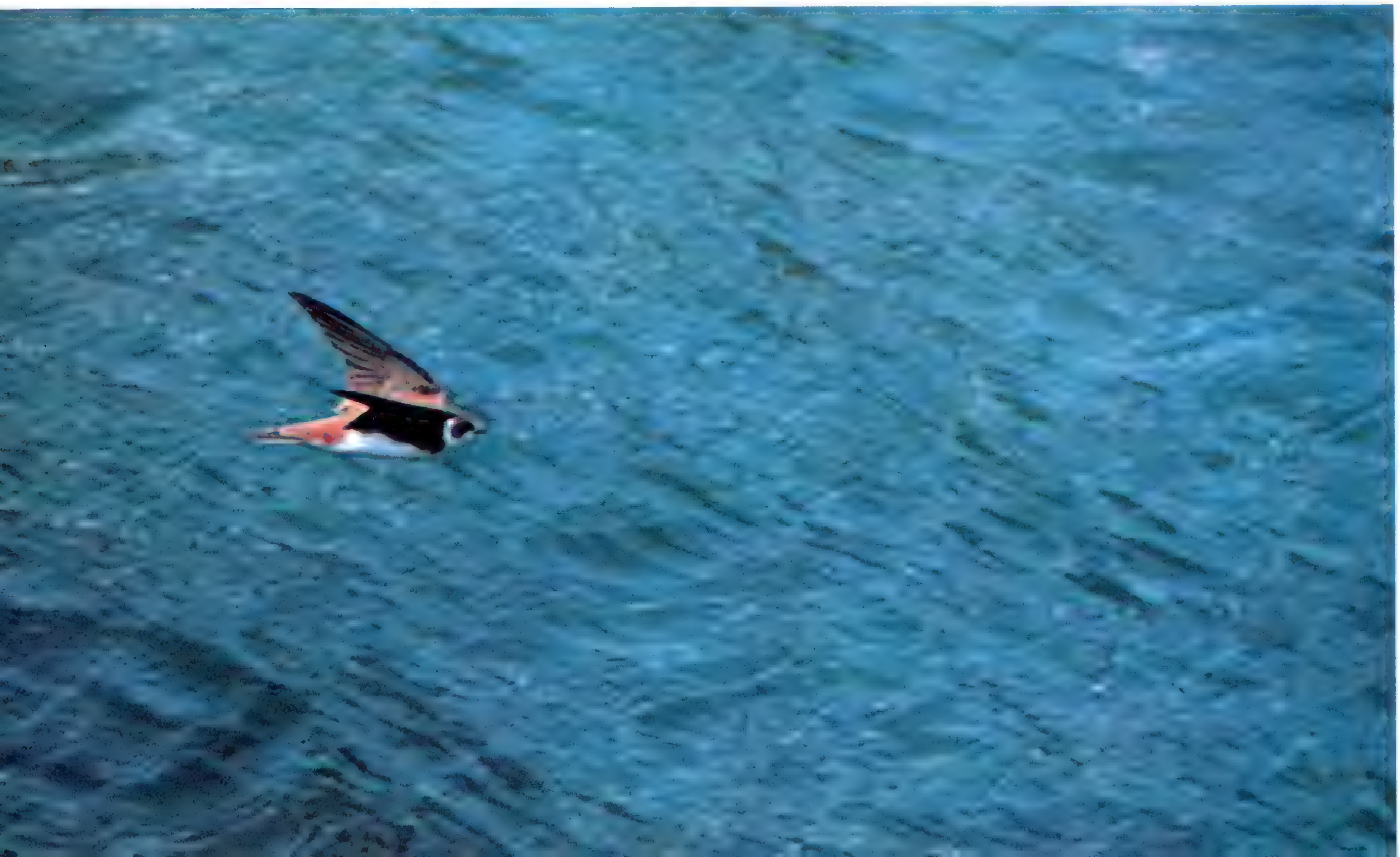
ツバメよりひとまわり小型で、全長14～15センチ、尾は燕尾型でなく凹型である。頭から下面は白く、上背面は藍黒色で、腰は白色でよく目だつ。全体の感じは、たいへんかわいらしい。あしは跗蹠（ふしょ）とゆびにも白色の羽毛（うもう）がはえている。ユーラシア大陸の大部分と北部アフリカに広く繁殖分布し、日本では北海道から九州まで繁殖している。

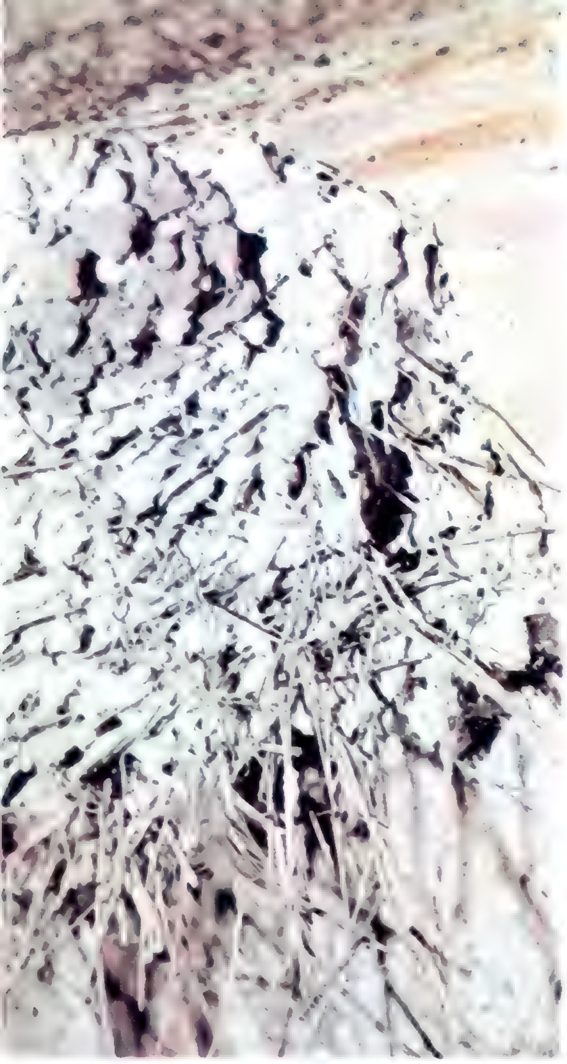
イワツバメの採食空間は、平地で繁殖しているものでも、高原や山地のものでも、ツバメにくらべるとはるかに高い。ツバメがよくやっているように、水面上を、左右に低く飛びまわったり、あるいは、町内の路上や林と林のあいだを通っている狭い路上を低く飛んで、いったりきたりしながら採食するようなことは、ほとんどない。

都市の高層化を歓迎？

イワツバメは集団営巣する性質が強く、山地や高原の岩壁、海岸の洞穴内、建築物などに巣をかける。巣の大きさは、ツバメの巣と同じくらいだが、上方に開いておらず、自然の岩壁や建物の天井状の部分と垂直方向の面とが直角をなすようなところにしか巣をかけない。巣の上方はその天井状の部分にくっつけられており、やっと1羽の鳥が出入りできるぐらいの狭い口を開けておくだけだ。しかし、巣材のどろが得にくい場合には、ツバメの巣と同じ形の上方が開いた巣をつくることもある。

ツバメの種小名は*rustica*だが、これはラテン語からきたもので、田園地帯にすんでいるツバメという意味の学名であり、ヨーロッパにおけるイワツバメの生息状態との比較の上でつけられたものだといわれている。イワツバメの種小名は*urbica*で、これは町にすんでいるツバメという意味なのである。日本におけるツバメとイワツバメの生息地を比較して







みると、ツバメのほうは"田園のツバメ"でも意味はとおるが、イワツバメのほうは"町のツバメ"では、ぴったりしないと思われるかもしれない。イワツバメの巣は、形や大きさこそコシアカツバメの巣とは異なるが、巣をかける場所に必要な条件は、コシアカツバメと同じで、西洋式の建築物に適している。だからこそ、ヨーロッパではイワツバメは市街地にもたくさん繁殖しているわけなのだ。

ところで、おもしろいことに、これまで日本ではイワツバメというと、海岸の洞穴に繁殖するものを別にすれば、高原か山地のツバメという感じが強かったのだが、最近になって、郊外や高地にコンクリートづくりの高層建築が新しく建てられたり、高速道路や鉄道などのコンクリートの橋脚がこれまでのイワツバメの生息地近くにふえてくるにつれて、イワツバメの営巣に適したところが増加し、市街地への進出が目だってきている。

イワツバメはツバメより上空をおもな活動圏とし、ツバメがあまり営巣しない高いところにも好んで営巣する性質があるという点も、この種の進出を容易にすることだろう。

1腹卵数は4～6個で、雌雄が抱卵し、孵化日数は15～17日である。ひなは、孵化後約20日で巣立ちするが、その後も同じ巣にもどってきて休んだり就塒することもあり、また、早い腹の若鳥が、2腹め、3腹めに生まれ、まだ巣内にいるひなに給餌することも知られている。



水面をかすめて飛びながら
えさを捕えるショウドウツバメ
崖に掘ったわが家で待つ
いとしい子どもたちのために
1日16時間も飛びまわるという。（左
PH. BILLE

イワツバメ：ツバメ科イワツバメ属。
小さな入り口のついたじょうぶな巣
とはいえ、巣立ったばかりの幼鳥も
しばらくは同居するから
夜ともなると，国電なみのラッシュだ。（左上）
PH. L. GAGGERO

巣づくり用の粘土を集めるイワツバメの夫婦
家つきの男に女は弱いと知ってか知らずか
雄は，何はともあれ巣づくりにとりかかり
そこに雌を誘いこもうとするという。
誘惑に負けた雌は仕事を手伝いはじめる。（上，下）
PH. BILLE





ヒバリ科　*Alaudidae*

ヒバリ科は15属75種からなるスズメ目の1グループで、極地以外のほぼ全世界に広く分布している。ただし、ほとんどの種は、アフリカを中心とする旧世界にすんでいて、オーストラリアとアメリカ大陸には、それぞれ1種ずついるだけだ。北方で繁殖する種は冬になると南へ移動するが、南方にすむ種のほとんどは留鳥（りゅうちょう）である。日本には、この科の代表種であるヒバリがいるだけだが、ときたま、ハマヒバリなどが迷鳥（めいちょう）として現われることもある。

全長は、12～23センチで、頭部に冠羽（かんう）をもつものも多い。耕作された田畑や草原であろうと、荒れはてた砂漠であろうと、あるいは海浜や川原であろうと、草丈の低い広々としたところならほとんどどこにでも見かけられ、人の手によって森林が切り開かれるとともに、その生息地がひろがっていく。

土になじんだ姿と生活

ヒバリ類は地上性の鳥で、スズメ目のなかでは、走りまわる能力においてもっともひいでている。なかには時速8キロで走れるものさえある。このことからも想像できるように、ヒバリ類のあしは長く、つめもよく発達している。ことに後指のつめが長い。

ヒバリ類の羽毛の色は、地域によって異なっているが、これも地上性の生活と結びついたものである。つまり、すんでいる土地の地面の色とよく似ていて、それがカムフラージュの役割を果たしているのだ。とはいえ、いずれにせよ、茶褐色とか灰色といったじみな色調が多いことはいうまでもないだろう。

この地域的な違いに応じて、同一種内に多くの亜種が認められるが、さらにこうした亜種の枠内でも、個体ごとに色調の変化が認められ、まったく同じ色彩のヒバリを2羽見つけることはめったにないほどだ。

この傾向は、ふつうのヒバリなどのように、耕地や草地で生活するものではあまり著しくないが、砂漠で暮らすスナヒバリ類ではこうしたことがよく見られる。中央アラビアでは、黒色の溶岩地と白い砂地とが隣接しているところがあるが、黒いほうのスナヒバリは非常に暗色であり、白いほうでは淡い灰色をしている。そして、一方をいくら追いたてても他方のすみ場所にいくことはなく、ぐるっとまわってもどってきてしまうという。

ヒバリ類は雌雄ともよく似た色をしている。ただし、原則には例外がつきもの。その例外の最たるものが上に図示したクロコウテンシ *Melanocorypha yeltoniensis* で、繁殖期の雄はあざやかな黒の羽色に包まれるが、雌は、他のヒバリ類と同じような色をしている。

このようにじみな色をしたヒバリ類が、それでもわたしたちにとってなじみ深いのは、いうまでもなく、その美しい鳴き声のためである。実際、ヒバリ類は、飛んでいるときでも、地上でも、よい声で鳴くものが多く、飼い鳥として愛好されているものもあるほどだ。

春になると、ヒバリ類の鳴き声はほとんどとだえることなく、田園の空高く響きわたる。さえずりながら、まっしぐらに舞いあがり、空中でつばさを羽ばたいて停止し、また空中をゆっくりと移動しながらさえずりつづける。そして、やがてつばさを閉じると、小石のように一気に急降下する。この飛び方からもわかるように、つばさは、非常に幅が広い。初列風切羽（しょれつかざきりばね）は10枚だ。

ヒバリ類のえさは、昆虫（こんちゅう）類や草の種子。夏には、鞘翅（しょうし）類やチョウ類、直翅類、クモ類を追いかけるが、秋から冬は種子を食べ、春になると昆虫類に穀物の若芽が加わる。ただし、ハマヒバリだけは、冬でも、浜べの海草のあいだにいるカタツムリや昆虫類などを食べている。種子を食べるときには、殻をとらず、砂や小石をいっしょに飲みこむ。そうすれば、種子はひとりでに細かい粉のようになるわけだ。

ヒバリ類は質素な性分で、水がほしければ、葉の上にできる露で満足する。水浴びをすることもないので、かなりの期間、水なしですますこともできる。そのかわり、砂を浴びるのが好きで、これはカムフラージュにも役だ



インドスナヒバリ。ヒバリ科スナヒバリ属。
学名は *Ammomanes phoenicura*。
土と同じ色の薄ぎたない姿。
でも、だからこそ
悪い奴の目をくらますことができるのだ。（上）
PH. E. HOSKING

ヒバリ科の分布。
極圏以外の全世界に生息するが
オーストラリアとアメリカ大陸には
それぞれ1種ずついるだけ。
どの種も広々と開けた地上で生活している。



っている

ヒバリ類は，地面に少しくぼみをつけて巣をつくる。巣は，かわいた木の根や細い草の茎でつくられ，たいした技巧もみられないが，巣の色は周囲の色とよく似ているので，なかなか目につかない。アフリカ産のものには巣の上に草の屋根をもつものがあり，またスナヒバリ類などでは，巣の風上側に小石を積んで壁をつくる。ひなは，飛べるようになる前に巣を離れる。一般に抱卵・育雛（いくすう）期間は鳥のなかでも非常に短いほうだが，これは隠れ場所のない開けたすみ場所である地表に巣をつくることと関係があるのだろう。

ヒバリ類は繁殖期にはつがいごとに分かれてテリトリー（なわ張り）をもって生活する。しかし非繁殖期には群れになっているのがふつうだ。ただし，とくによくまとまった群れをなすわけではなく，ルーズな集合という程度にすぎない。

スナヒバリ　*Ammomanes deserti*

スナヒバリは，全長約15センチ，からだの背面はややレンガ色をおびた灰色で，腹面はクリーム色がかった白の目だたない鳥だ。ただし，この色調は，すむ土地の色に合わせて微妙に変化している。

北アフリカから小アジアをへてインドにいたる地域に分布するが，その名のとおり，耕作地帯を避け，小石の多い不毛な場所にいて，小石のあいだからえさを捜しだす。エジプトでは，ファラオの宮殿の廃墟に出入りし，砂漠では，遊牧民の野営のまわりで見かけられることが多い。この鳥の呼びかけの鳴き声は澄みきっていて，そのうら寂しげな調べが人の心を打つという。

スナヒバリは留鳥だ。たいていつがいで暮らしていて，数の多い群れになることは珍しい。テリトリーは，小石や禾本（かほん）科植物の点在する数メートル平方の地面にかぎられ，これほど狭く，不毛な場所で生きているのが不思議なほどだ。つがいは出無精で，すむと決めたところから離れようとはしない。

繁殖期は，1，2月ころに始まる。そのころになると，雄は押えつけたようなさえずりを繰り返し，雌にやさしく呼びかける。そして，つばさを持ちあげながら雌のまわりをぴょんぴょん跳びはねる。

巣は突きでた小石の下や，地面のくぼみ，草の茂みにうまく隠され，人目につきにくい。1腹の卵数は3，4個で，黄色みをおびた殻には，赤と褐色の斑点（はんてん）がある。

モリヒバリ　ヒバリ科モリヒバリ属
広々としたところの好きなヒバリ類のうちでは
森の近くにすんでいるので，この名がある
モリモリ太っているからでは決してない
今は，羽毛をふくらませているのだ（上）
PH. F. LISIGE JACANA



スナヒバリ　ヒバリ科スナヒバリ属
不毛な土地
狭いテリトリーに根をはって
ほとんど外に出ていくこともない
大地に生きるたくましい鳥だ（下）
PH. E. HOSKING



モリヒバリ *Lullula arborea*

モリヒバリは，全長約15センチ，体重約30グラムの，ヒバリによく似た鳥だ。しかし，尾が短く，ヒバリのように尾の外側が白くなく，さらに，眉線がよく目だつ白なので，見分けがつく。からだの上面は薄黄褐色で，黒い縞があり，下面はクリーム色がかった白，つばさの手首（にあたる部分）には白と黒の斑点がある。

スウェーデンの南部からヨーロッパ大陸全域で見かけられ，小アジアとイランにも広く分布している。北方で繁殖するものは，冬になると南へ渡り，北アフリカに達するものもある。

モリヒバリの名はあるが，深い森にははいらず，耕地もきらいで，林縁や森のなかの空地，灌木などがまばらにはえた荒野，ブドウ畑などにすんでいる。

この鳥は，3月から11月にかけてのヨーロ



ピーチュク，ピーチュク
ツィー，ツィー，ツィー
澄みきった空高く
軽やかなヒバリのさえずりが響きわたる。
うららかな田園の春の交響詩。（上）

撮影　水野仲彦

地上生活に適応した長いあしは
このモリヒバリにかぎらず
すべてのヒバリ類に共通した特徴だ。
短い足を気にしている人は
これを見習って，歩け，歩け。（下）

PH. ARDEA PHOTOGRAPHICS

ッパで，優しく澄んだ鳴き声を聞かせてくれる。ただし，7，8月には中断することもある。杭や小灌木にとまってさえずることもあるが，ふつうは，地上数十メートルの空に輪を描いて飛びながらさえずる。これは，「ドリ」ドリュドリュ……」とか「ルルル……」といったもの悲しげな楽句で，ふつうのヒバリのあの勝ち誇ったようなさえずりとは，かなり違いがある。また，仲間を呼ぶときの鳴き声も，近縁種のものよりはるかに優しく，短く控えめに「ディドリ」と鳴く。春には，昼間だけでなく夜もさえずることがある。

この鳥は，大きな群れをつくることはないが，夏と秋には小さな群れになっていることが多い。冬の終りになると，すぐにつがいができあがり，春の間いっしょに暮らしている。

巣は地面につくられる。ふつうは，うまく隠れるようになった茂みの下や，この鳥が自分で掘った小さなくぼみに多い。コケやかわいた草木，木の根などからできていて，深さはかなり深い。

4月のはじめに，雌は1回めの産卵を行なう。1腹の卵数は3，4個，淡褐色と灰色の斑点がまだらについた白っぽい卵だ。2度めの産卵は5，6月に行なわれるが，ときには卵数が5個あるいは6個のこともある。抱卵は雌の役目で，2週間ほどすると，ひながかえる。ひなは，生後10～15日で巣を離れるが，まだ飛ぶことはできず，小ネズミのように駆けまわっている。巣を出て2週間もすると，家族関係は絶たれてしまい，ひなは親鳥に追いたてられてしまう。これは，親鳥が，まもなく2度めの抱卵にとりかからなくてはならないからだろう。

秋のはじめになると，モリヒバリは分散する。そして，北のほうのものはほとんどが，単独あるいは小さな群れをつくって，南へと旅立つ。しかし，非常に高いところを飛ぶので，鳴き声が聞こえなければ，ほとんど気づくことはないだろう。

ヒバリ *Alauda arvensis*

ヒバリは，日本でもヨーロッパでも，ヒバリ科のなかでいちばんよく知られた鳥だ。スズメよりやや大きく全長約17センチで，尾が長く，その尾の外側が白くて，頭には小さな冠羽がある。からだの上部は黒い縦斑(じゅうはん)のはいった褐色だが，下面は全体に白っぽく，胸からのどにかけて黒い小縦斑がついている。後指のつめが著しく長い。

この鳥は，ヨーロッパのほぼ全域，北極圏以南のアジア全域，北アフリカに分布し，北方のものは渡り鳥となっている。日本では留鳥か漂鳥（ひょうちょう）で，全国各地の草原や畑にすんでいる。

ヒバリは，地上生活に適しているが，遠くまで飛んでいくこともできる。空高く，「ピーチュクピーチュク」とさえずりながら上昇していくヒバリの姿は，だれでも見たことがあるだろう。このときには，ヒバリは風に面と向かって，規則正しく羽ばたいている。すると，だんだんまっすぐ上のほうにのぼっていくのだ。こうして見えなくなるほどの高さに達すると，ヒバリは大きな渦巻(うずま)き曲線を描いて旋回する。やがて，両方のつばさをからだにぴったりとくっつけて垂直に急降下し，地上近くまでやってくると，つばさを開き，静かにおり立つ。



ヒバリ　ヒバリ科ヒバリ属
巣から離れたところに舞いおり
用心深くあたりをうかがいながら
えさを待つひなのところに歩いていく
これも子どもへの愛がもたらした知恵か？（上）
撮影　[illegible]



ヒバリの卵
1腹の卵数は4，5個
大きさは22×16.5ミリくらいで
褐色の斑点がぎっしり散りばめられている（下）
撮影　[illegible]



ヒバリの鳴き声は、春の野に、明けがたから夕暮れまで休むことなく響きわたる。このさえずりは、歯切れのよい澄みきった調子をもっていて、いろいろなリズムでさまざまなモチーフを形づくっている。このため、ヒバリは飼い鳥として広く愛玩されている。

ヒバリは、渡りの最中や越冬期間中は仲がよいが、繁殖期になると、雄は非常にけんか好きになる。ライバルどうしの争いに、第3の雄が加わって、いっそう複雑になることも多い。ときには、この争いに雌が加わることもあるらしい。

ヒバリの巣は、ムギ畑や草原、野菜畑につくられる。草の根元を少し掘り、枯れ草や細根などを置いた外径10センチほどの椀型で、巣づくりの作業は雌だけが行なう。1腹の卵数は4，5個で、卵の殻は、灰白色の地に灰色と褐色の小斑点が一面にぎっしりついている。抱卵も雌の役目で、2週間たらずでひながかえる。羽毛の色は地面とほとんど見分けがつかないほどだが、それでも、ひなは猛禽類や獣類の犠牲になることが多い。

ヒバリのおりたところを捜しても巣はないという言い伝えがあるが、これは事実のようで、空から舞いおりるときは、巣から少し離れたところに着地し、用心深くあたりをうかがいながら巣まで歩いていく。とくに雄はこの傾向が強いようだ。ただし、飛びたつときは、巣のそばからでも舞いあがる。

ハマヒバリ *Eremophila alpestris*

ハマヒバリは全長15～18センチの小鳥で、ヒバリ類にしては珍しくあざやかな斑紋をもっている。全体としては砂褐色の上面と白っぽい下面をしているが、雄の夏羽ではほおと上胸が黒く、そのあいだののどが黄色であり、額からはち巻状に頭上をめぐる黒帯があって、その後端は角状に突出している。このため北アメリカでは《ツノヒバリ **Horned Lark**》と呼んでいる。この鳥はヒバリ科のなかでアメリカ大陸にまで進出した唯一の種で、北極圏からメキシコまで広く分布し、奇妙なことに南アメリカのコロンビアのアンデス山中に1か所だけ飛地をもっている。旧世界でも北極圏から北アフリカと近東の砂漠にかけて分布するが、日本には迷鳥（めいちょう）としてまれに渡来するにすぎない。



スズメヒバリの一種。ヒバリ科スズメヒバリ属。
属名は *Eremopterix*。
南アジア、アフリカに分布する
クロコウテンシとともに
ヒバリ科としては数少ない雌雄二型の例。（上）
PH. J. BURTON-PHOTO RESEARCHERS

春空高く、誇らかに舞い歌う
晴れの舞台とはうらはらに
ヒバリの地上での生活は、清貧そのもの。
葉の上にできた露に渇をいやし
砂ほこりにまみれて暮らすという。（下）
PH. J. MARKHAM

日本の越冬ツバメ

内田康夫

ツバメといえば、夏鳥の代表、という一般的な認識を裏切って、冬も寒い日本を去らず、何十羽何百羽という群れをつくって越冬しているツバメたちがいる。これを「越冬ツバメ」と呼び、毎冬、地元では新聞やテレビのニュースにもなっている。現象としてのおもしろさに加えて、かれらの一部が、人家の室内をねぐらとしているため、いっそう親しみをもたれているのであろう。

一方、生物学者のほうは、なぜかれらは寒い日本を去らないのか、いったいかれらは地元の鳥なのか、それともどこか遠くから渡ってきた鳥なのか、といった素朴な疑問に始まって、人それぞれにいろいろな観点から興味を持ち、故籾山徳太郎氏をはじめ、何人かの研究者がこれを研究対象としてきた。筆者は、現在、その何代目かの研究者としてここ数年来、かれらと接しているが、そのなかのいくつかの知見をここに紹介しよう。

西日本に多い

越冬ツバメの皮切りは、静岡県浜松市馬郡の河合八重吉氏宅（当時）の場合であり、ここは現在当主が福山貞雄氏に変わっているが、引きつづいて〝ツバメのお宿〟として定まっている。本州では、ほかに、千葉県や京都府のものが知られていたが、現在は確かな消息を聞かない。散発的な観察例は関東を北限としてかなりあるが、それらは個体数もわずかで、しかも定住しないものばかりである。毎冬きまって訪れるという定住地となると、浜松以外は、九州に限られるようだ。それも確実な〝定宿〟となると、熊本市郊外の甲佐町にある本村慶蔵氏宅ただひとつである。佐賀市中心部、熊本市中心部白川沿い、国鉄八代駅周辺、宮崎市大淀川沿いなどは比較的定着性の強い地域だが、いずれも就塒が屋外なので年による環境要因の変動が大きく、〝定宿〟として固定されたものはない。そして、九州の場合は本村氏宅も含めて、ここ5、6年来のことである。



ツバメを調べる筆者　提供　筆者

事の起こり

以下、〝定宿〟として固定している浜松の場合について述べてみる。そもそもの始まりは、今から40年以上もむかしの昭和初期にさかのぼる。ある初冬の夕方、当時、事務所となっていた一室の軒先に2、3羽のツバメが訪れ、しきりにあたりを飛びかっていたという。やがてかれらは軒下で寝るようになり、気の毒に思った家の人がガラス戸をあけておいてやると、まもなく室内の電燈線にとまって寝るようになった。それが毎年の習慣となり、ときには1羽の訪れもなかった冬もあったが、全体としては、しだいに数がふえ、1961年から62年にかけての冬のように、約1000羽に達した年もあった。現在は、100羽から150羽の間を上下している。

渡来と渡去

かれらの定宿への訪れは、きまって10月下旬である。福山氏宅は、浜名湖周辺に多い養鰻池のまん中にポツンと立っており、養鰻を家業とされている。夏の間、その付近を飛びまわっていたツバメたちが姿を消して2か月近くもたってから、ある日、忽然と20～30羽のツバメたちが現われる。とくに夕方になると、前の養鰻池の上を盛んに飛びまわる。それが2、3日続いたのち、その群れの一部が、用意を整えてあけはなしてある戸口から、サッと飛びこんでくる。それ以後はしだいしだいに室内をねぐらとするものがふえ、年を越した1月下旬から2月にかけて最高羽数（年によって数は異なる）に達する。

やがて、また少しずつ減少していくが、3月中～下旬に減り方が目だつようになり、4月中旬には10～20羽くらいになってしまう。ときに5月にはいっても数羽が残っていることもあるが、ふつうは4月中にすべての越冬個体が去ってしまう。ここで気がつくのは、かれらが夏のツバメとまるきり反対の時期を日本で過ごしているという事実である。つまりかれらは典型的な〝冬鳥〟なのである。

冬の生活

夕方、かれらは次々と福山氏宅へもどってくる。荒天の日でないかぎり、それは日没前後であり、午後5時30分までにはほぼ全群が帰着する。それを見はからって外の雨戸をしめてしまうが、室内のかれらは就寝前のおしゃべりを楽しんだり、羽づくろいに余念がない。隣室から電燈の明りがもれていても、だいたい6時ごろにはおとなしくなってしまう。朝は6時30分から7時の間に戸をあける。気温が零度に近い日でも、晴れてさえいればいっせいに飛びだしていく。まず、前の池で水を飲んだり、水浴びをする。もちろん、飛びながらである。そして、真北の方向、約1.4キロの距離にある丘の上の雄踏小学校へ向かう。この小学校の周辺が、朝の採餌と運動・整羽・休息の重要な拠点となる。

ここで群れはいくつかに散り、とどまるもの、さらに北へ向かうもの、東や西へいくものなどに分かれる。なかには、浜名湖を越えてかなりの遠方へ出かける個体もあるが、主たる行動圏は、この小学校を中心とする半径1、2キロの円周の内部、とくにその北半分である。

採餌地は、周囲を20～30メートルぐらいの丘で囲まれた盆地状の冬田の上空で、高いときは50メートル以上の高空を旋回している。そのために、肉眼ではなかなか気づかない。それはむしろ、イワツバメやアマツバメの領域であり、低空を滑るように飛んで採餌している夏のツバメとはかなり印象が違う。養鰻池や浜名湖のひき堀などの水面近くには、冬でもユスリカ類の蚊柱が立っているのも見かける。だが、冬のかれらは絶好のえさ場と思えるこうした水辺や低空はほとんど飛ばない。そして、何がいるのかわからない吹きっさらしの高空を1日じゅう旋回している。しかし、帰ってきたかれらはずっしりと重く、大きなふんを盛んにして、そのえさの豊富なことを誇示しているがごとくである。

ここもふるさと

一方、室内での調査も平行して行なわれている。換羽、体重変化、皮下脂肪、生殖腺、ふんといった生理的な面が主だが、ここでは、標識検査でわかったことを羅列するにとどめる。



屋根裏電線上の越冬ツバメ　撮影　吉井　正

① 10月末、まず室内にはいってくる鳥の70～80%は、すでに標識の付された古参者である。

② 日数とともに個体数がふえてくるが、増加分はすべて新参者である。

③ 新参者は10月末では成鳥と幼鳥が半々だが、その後はいってくる新参者の大部分が幼鳥のため、新参者のなかでの幼鳥の割合は70～80%になる。

④ 一度室内へはいってきた鳥は、越冬期間を通して毎日もどってくる。

⑤ 幼鳥の翌冬の帰還率はやや低いが、成鳥の帰還率は高く、死亡しないかぎり、ここで越冬した鳥は再び同じ家へ帰ってくるものと思われる。

これらの事実は、ツバメたちが繁殖地の古巣へもどるのと同じく、越冬地も第二のふるさととして、強い執着を持っていることを示している。では、かれらの第一のふるさとはどこなのか？

着色標識の結果、かれらが〝地元〟の者でないことはほぼわかってきた。では、どこなのか。最初に提出された、この素朴な疑問はまだ解けていない。筆者は、いくつかの根拠からおそらく中国東北部か東シベリア産ではないかと推定しているのだが、まだ、確証をつかむにいたっていない。■（浦本野外動物研究会会員）

早春のヒバリの争い

小淵順子

日一分日一分　利取る利取る……

田畑に響きわたるヒバリのさえずりは、うららかな春の風物詩である。だが、こののびやかなさえずりの陰で、生活をかけたなわ張り（テリトリー）争いが繰りひろげられていることを知る人は少ないだろう。以下に、この争いを観察日記ふうにつづってみたい。なお、これは1965年の春、長野県小諸市小原地区での観察に基づいたものである。

2月19日　観察地ではじめてヒバリの姿を確認する。まだ、このころのヒバリは歌も歌わず、アカザやヨモギなどの枯れ草が残る畑で、ひっそりと種子やハコベのつぼみをついばんでいる。双眼鏡で地面をなめるようにして捜さないとなかなか見つからない。

2月26日　さえずりを始めた。ただし、地上さえずりしか聞かれない。

3月8日　午前8時35分（晴れ、気温3度）、はじめて空中さえずりを確認する。このころの気候はまだきびしく、日陰には雪が残っている。

3月13日　裸地が見えないほど積雪。

3月16日　朝から東風を感じる。やっと春だ。気候の変化とともに個体数も徐々に増加している。

・ *

鳥の世界 もうひとつの見方

浦本昌紀

19 特殊な繁殖をする鳥たち

これまで，鳥の世界に見られる繁殖のしかたのいろいろについてながめてきましたが，そこにはもっと変わったものがごく少数ですが見られます。今回はそうした変り者のことをお話しましょう。

雄の集団踊り場に雌が訪れ，交尾後にひとりで営巣してひなを育てる

そのひとつは，前回に，特定のつがいをつくらないものとしてお話した鳥たちです。そのいちばん極端な形はエリマキシギやキジオライチョウで有名になっているものです。このような鳥では，繁殖期になると雄は毎朝きまった場所に集まってきます。集まってくる雄の数は種により条件によっていろいろですが，キジオライチョウでは400羽以上のこともあるという記録があります。そして，この集合場所は毎年一定していて，そのそばに鉄道が敷かれても，中央に道路がつくられても，その場所を使いつづけたことさえ知られています。

集まってきた雄はこの場所内の各所にめいめい陣取り，自分のまわりの狭い区域をほかの雄から防衛します。つまり，ここは小さなテリトリーがいくつも集まったような状態になるのです。それぞれの雄は毎朝〔また生きているかぎり毎年？〕同じ小区域を占めるようです。そして，隣の雄と争ったり，いろいろな姿勢や動作で《踊ったり》，《鳴いたり》します。雌たちはこの場所を訪れて，雄のなかから気に入った雄を選び，交尾をしていくのです。

このように，雄が決まった集合場所または集団踊り場〔英語ではアレナ arena と呼んでいます〕にめいめい小さなテリトリー〔英語ではレク lek またはコート court といっています〕を持ってそこで《踊り》，雌はそこを訪れて交尾したのち，ひとりで営巣してひなを育てる，という繁殖のしかたと雌雄関係は，鳥の世界ではこのほかいくつもの種で知られています。なかには，このような典型的なものからはずれたものもあります。

集団踊り場内で，雄どうしの距離が離れている種では，雌は雄から雄を渡りあるいているらしい

そのひとつは，集団踊り場に集まった雄たちがめいめい決まった区域を占領することがなく，そこを何羽かで共有の踊り場として使うもので，これは，オオフウチョウ，マイコドリ類の一部，ノドグロミツオシエなどで知られています。もうひとつは，めいめいの雄の踊り場〔小テリトリー〕がかなりの距離をへだてているもので，したがって集団踊り場はうんと広い地域にひろがったものになっています。

その距離が遠い場合には，とても“集団”踊り場とは思われないほどで，雄がそれぞれ広いテリトリーを持ちそのなかの特定の場所で踊るというコトドリの場合と区別ができなくなります。区別点は，雌が何羽もの雄の間を回ってあるいているかどうか，ということだけです〔それが確かめられていない鳥のほうが多いのですが〕。この極端な例としては大型のキジの一種セイラン，フウチョウ類の大半，ニワシドリ類の大半などがあり，各雄の“踊り場”は数百メートルから1キロ以上離れています。

このようなものまで含めると，こうした繁殖のしかたは，上記の鳥のほか，ハタオリドリ科〔オドリハタオリ1種だけ〕，カザリドリ科〔一部〕，マイコドリ科，タイランチョウ科〔1種だけ知られている〕，ハチドリ科〔大半〕，ノガン科〔一部〕，ライチョウ科〔一部〕などに見られます。

このような鳥の多くは，その踊り場にする枝の葉をむしりとったり，草を踏み倒して踊り場をつくったり，森林内で地上の落ち葉や枯れ枝を清掃して踊り場にしたりしています。ニワシドリ類の鳥はたいへん手のこんだ踊り場をつくることでとくに有名です。コトドリの雄も森林内の地上に踊り場をつくって繁殖期中踊っているのですが，最近の研究では，一夫一妻であるらしいといわれています。



オオフウチョウ
集団でディスプレーする雄の周辺に雌が集まる

このような鳥たちは，なぜこんな変わった生活をしているのでしょうか。このなかには動物食の鳥はひとつもなく，熱帯林の果実食の鳥や草原の種子食の鳥がほとんどであることから，食物が楽に手にはいるために，こんな生活をすることができるのだ，という考えがあります。それもひとつの条件でしょうが，そのような食性の鳥がすべてこうした生活をしているのではありませんし，北方の針葉樹林にすむクロライチョウがこの生活をしていることからすると，ほかにも問題はいろいろあるのです。

共同繁殖する種では，雌雄の全部が協力してひとつの巣をつくり，卵やひなをみんなで世話する

次に，もうひとつの変り者は共同繁殖生活をする鳥です。このなかにもいろいろなやり方がありますが，もっとも極端なのはゴウシュウムシクイ類の一部とオオハシカッコウ類と80号の解説に記したオオツチスドリです。

このような鳥では，何羽もの雌雄がひとつのテリトリー内に群れになって生活し，全員で協力してひとつの巣をつくり，ときには2羽以上の雌がそこに卵を産み，卵やひなの世話を全員でするのです。この場合，ゴウシュウムシクイの一種とオオツチスドリでは，脚環（あしわ）をつけて1羽ずつ区別し何年も観察した結果，この群れのメンバーはひとつがいの雌雄とその子どもたち〔主として雄〕であることがわかりました。しかし，この群れのなかで，2羽以上の雌が産卵するときの雌雄関係はわかっていません。

このような生活は非常な変り者のように見えますが，鳥の世界をくわしく調べてみると決してそうではないのです。産

カラーページ解説

＊ ———→

3月17日　観察地内で9羽の個体を数え，今まで観察できなかった争いが1日じゅう繰りひろげられた。この争いは，①でa個体とc個体の2羽が採食しているところにb個体が飛来した6時30分から始まった。aは東に，bは西に陣取ったが，cは直接争いには参加せず，ときどき，1羽だけでどこかに飛び去ってしまうこともある。bはつねにaに戦いをいどみ，東のほうへ寄ろうとするが，aに追いもどされることが多い。しかし，それでも，10時ころから争い地点は東へずれはじめ，12時過ぎには②，夕方6時過ぎには③地点まで移動していた。

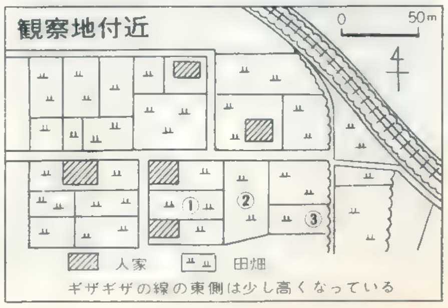
きょうは，9時過ぎに降りはじめた雨がみぞれまじりの雪に変わり，その後，また薄日がさしながら雨が激しく降るという奇妙な天気だったが，争いは，ときどき中断しながらも，午後6時7分に暗くなって見失うまで続けられた。

この争いのようすを詳しくみてみると

(1)　2羽が比較的そばの地上に位置する場合，たがいに近づき，つばさをいっぱいにひろげ，姿勢を低くしてツツツーとすばやく進み，ある間隔まで迫ったところで向かいあい，激しくぶつかりあって，空中に舞いあがる。その高さは，平屋の屋根を越すこともある。ときには，地面におりても相手をくわえたまま，はなさないこともあり，このような激しい争いのあとには，くちばしに羽毛がついている。また，空中へは舞いあがらず，地上で組みあうこともある。そして，このような争いの間は，双方が競いあって地上さえずりをする。とくに争いの激しかったのは午後1時32～41分で，この10分間に41回もぶつかりあった。なお，1分間の最高は13回にのぼった。

(2)　a，b 2羽が争っているとき，他の個体が一方の個体aのテリトリー内へ舞いおりると，aはすぐその近くへ飛ぶ。すかさずbもaのあとを追う。するとaはあとから進入してきたbをすぐ西へ追いかえす。

(3)　bが大声で地上さえずりしながら境界線を越えて侵入してくるとき，aからbの姿が見える場合は，aはある程度までは無関心に採食しているが，領分に深くはいり込むと，足早に走ってきてbを追う。bはひらりと後退するが，執拗（しつよう）に東へ進むことをやめない。aからbが見えない場合は，aは大声でさえずりながら直線的にbのい



卵こそしませんが，巣づくりから抱卵・育雛を子どもたちが手伝うという例はかなり多くの鳥で知られています。その手伝う鳥が子どもたちかどうか〔脚環をつけて観察していないので〕わからない場合を含めれば，その例はさらに多くなります。日本の鳥ではエナガが，２羽以上の鳥でひなに給餌することで比較的よく知られています。少し横道にそれますが，このように親鳥の繁殖を〝手伝う〟のは，孵化後１年以上たった子どもたちとはかぎりません。同じ繁殖期に２回，３回と続けてひなを育てる鳥では，先に巣立ったひなが弟妹にえさをやることがときどきあります。また，まれですが巣づくりや抱卵を手伝った例さえあります。このような例の極端なものとしては，ひなが親鳥からえさをもらったのちに同じ巣のひなにそれを与えた，という場合さえ知られています。

こういう極端な例外を別にすれば，このような共同繁殖は，経験の足りない子どもたちが自分で繁殖するのと，親鳥のもとに残って手伝うのと，どちらのほうが結局多くのひなを育てあげ独立させることができるか，という作戦の問題と見なすことができます。

どちらをとるかは，その鳥の食物やすみ場所や巣の安全度によって大きく影響を受けているのでしょう。なお，その鳥の子どもたちではない鳥が〝手伝い〟をしていたと思われる観察例もいくつもありますが，それはまた別の問題になります。

托卵性の鳥は約80種以上もあり，カッコウがよく知られている

もうひとつの変り者は，自分の卵をほかの鳥の巣に産みこんでその鳥に育てさせるという，いわゆる托卵性の鳥です。この生活はカッコウやホトトギスで有名であり，日本ではその仲間のジュウイチとツツドリとを含めた４種でしか知られ



カッコウのひな(左)に給餌するムシクイ

ていません。しかし，鳥の世界を見渡すと，こうした繁殖のしかたは80種以上に見られますし，逆に，ホトトギス科の鳥のなかには托卵性でない鳥も多いのです。

鳥の世界で托卵性の繁殖をするものは，ホトトギス科の鳥のうちに約50種あるほか，ミツオシエ科の鳥のおそらく全部〔15種〕，ムクドリモドキ科の鳥のうちコウウチョウ類の大部分〔５種〕，テンニンチョウ類〔アトリ科〕の約10種，カッコウハタオリ，ズグロガモの合計約85種が知られています。この習性はホトトギス科の鳥だけの専売特許ではありません。それは，鳥の世界ではおそらくそれぞれ別々に生じたものと考えられるのです。

このなかでその習性がもっともよくわかっているのは，ヨーロッパ産のカッコウ〔日本のカッコウと同種〕で，それについてはカラーページ本文で触れられることでしょう。このような托卵性の鳥は，抱卵・育雛の仕事をしないですむということだけを考えれば，親鳥の手間がはぶけてたいへん楽な生活を送っているように思われるかもしれません。しかし，托卵性の生活をするためには，ほかの鳥にはない種々の問題を解決しなければならないのです。たとえば，ほかの鳥の巣を捜し，ちょうどよいときに産卵するということだけでも，ちょっと考えるよりははるかにやっかいな仕事です。卵やひなが仮親に気づかれてはならないので，その対策が必要な場合もあります。

托卵という繁殖方法は，他人のふんどしで相撲をとるわけだが，それなりの苦労もある

ホトトギス属の鳥の場合には，スズメ目の小型の鳥に托卵しますが，その卵はカッコウのからだにくらべてうんと小さくて，小鳥の卵に近い大きさです。これは仮親に気づかれないことだけでなく，仮親のすきを見て非常な短時間でサッと産卵するという習性にも関連があります。仮親は地域によって一定の鳥に決まっていることが多く，卵の色や斑紋はその鳥の卵によく似ています。雌は仮親の営巣状態を絶えず見張っていて，仮親が第１卵を産んだ日に産卵し，仮親の卵を取り去って数を合わせます。卵が孵化するまでの日数は短く，孵化したひなは仮親の卵やひなを全部巣の外へ放りだしてしまい，１羽だけで小さな仮親に給餌を受けて育つのです。

このように特別な性質を持っていることとは，かれらの托卵性が非常に古く生じたものであり，仮親にされる鳥もそれに対抗して見なれぬ卵を見わける能力を進化させてきたことを示しています。

しかし，すべての托卵性の鳥がこのような性質を持っているのではありません。ホトトギス科でもオニカッコウやマダラカンムリカッコウのひなは仮親の卵やひなを押しだす性質を持たず，テンニンチョウ類とコウウチョウ類でもひなは仮親のひなとともに育てられます。

ミツオシエ類とカッコウハタオリのひなは１羽だけで仮親に育てられますが，仮親のひながどのようにして見えなくなってしまうのかはわかっていません。

コウウチョウ類は６種のうち５種が托卵性ですが，南アメリカ中部産の残る１種は他の鳥の古巣を使ったり使用中の巣を奪いとったりして繁殖することがふつうです。また，托卵性の５種は，産卵のときに仮親の卵を取り去らないし，仮親は〔１種を除いて〕一定に決まっておらず，したがって卵の大きさや色が仮親の卵に似ていません。このようなことは，コウウチョウ類の托卵性は比較的近年に生じたものであり，托卵性でない１種はそこへいたるまでの途中の段階を示しているのかもしれない，ということを考えさせます。

一方，カモ類とキジ・ウズラ類では，正常には托卵性でない鳥が同じ種または異なる種の巣に産卵したという例が数多くあります。かれらのひなは早成性ですから，孵化後の親鳥の負担は晩成性の鳥のように大きくありません。ズグロガモの托卵性はこの性質が進んだものとも思われます。また，前述したオオハシカッコウ類の共同繁殖から，他鳥の巣へ産卵する習性が生じたのではないかと考えた学者もあります。

托卵性という奇妙な習性がどのようにして生じたのかは，現在まだよくわかっていません。それは，この作戦をとったほうがふつうの繁殖のしかたよりも多くの子孫を残すことができる，という条件のもとでしか生ずることはできなかったでしょう。その条件がどんなものかを明らかにするのはこれからの研究にまかされているのです。■（え　牧野四子吉）

カラーページ解説

るところへ飛んできて追いだす。

(4)　bが上空さえずりを終えて着地すると，aが数十秒後対抗するように上空さえずりを始める。先に降りていたbは，そのすきをついて即座にaとの境界へ舞う。あまり進入しすぎると，aは急降下してbを追いだす。

(5)　aが空中さえずりを始めると，bはaの声のするほうを向き，大声で地上さえずりを始めることもある。この場合，比較的高い土盛りや，耕したうねの上などに上がることもある。

これらは，ヒバリ対ヒバリの争いであるが，このほかにも，近くへくる他種の鳥との争いも見られた。たとえば，

(A)　激しく争っているときに，そばへスズメがくると，スズメをもつつく。スズメはすぐに逃げる。

(B)　ツグミに対してもかかっていこうとするが，ツグミが姿勢を低くかまえると，はねあがって逃げる。

(C)　キジバトが採食しているところに出合いそうになると，よけて通る。

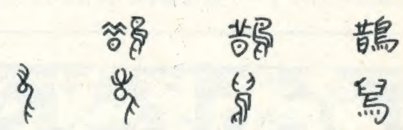
×　×　×

以上のように種々な争い方で戦いながら自分のテリトリーを決め，繁殖にはいる。その後，巣づくり，産卵，抱卵（ほうらん），育雛（いくすう）の時期には，(1)のようなはげしい争いはないところから，(1)は早春，なわ張りを決めるときに特有の争いと思われる。■

（長野県岩村田小学校教諭）

漢字のふるさと　59

藤堂明保



鵲（かささぎ）　中国では喜鵲 xiquè と呼ぶ。というのは，恋人がくるとか，結婚がきまるとか，おめでたい前兆としてカササギが鳴くのだ，といういい伝えが全国に広がっているからである。たとえばひとり娘の巧妹が〝むこ選び〟をする物語。３人めにがっちりした若者が門前に現われて「よい鉄打ってカマとクワ，ふたりで耕しゃゆたかな稔り，手に手をとって白髪まで」と歌うと，巧姐が「この人にきめたわ」と門をあける。そのとき木の上で２羽の喜鵲が「査査」と喜びのサインを送り始めました（民間故事選）――というふうに語られているのである。

このお話にみえるように，カササギは査査（チャチャ）と鳴くのである。その声を表わすために「鳥＋音符昔 tsiak・siak」をあわせて鵲と書いた。この字，今では què（チュエ）と発音するが，むかしは ts'iak という発音であった。まさしくチャッ，チャッと鳴く声をまねた擬声語なのである。

鵲とまったく同じことばを表わした象形文字が舄 tsiak（シャク）であった。この字は大きく口をあけて鳴いている鳥の姿を描いた字である。だがこの字はほとんど使われず，むしろそれに三ずいをそえた潟（シャ）という字が，瀉（シャ＝水がうつる→水が動いて出入するひがた）の代用として使われるにすぎない。わが家の庭の白モクレンにオナガドリが巣をかけて，朝な夕なに鳴いている。日本人の耳にはギャーッときこえるのだが，中国人はそれをチャッ，チャッと聞く。私には耳ざわりな声だが，中国人はかん高い声を愛するので，喜び事のしらせとして，木の枝を見あげるのだろう。■



ペットのノミの駆除

〈問〉イヌ、ネコのノミの駆除は、どのようにしたらいいのでしょうか。

（鹿児島市・出渕花子・55歳・無職）

〈答〉ノミは世界に約1000種もあるとされています。日本にどこでもいるのは、ヒトノミ、イヌノミ、ネコノミ、ネズミノミ、ニワトリノミなどですが、ヒトノミ、ネズミノミ、ニワトリノミなどが、イヌやネコに寄生することもあります。イヌノミやネコノミは、おたがいにイヌやネコにうつりあって寄生しますし、人も襲って刺します。



からだは扁平でかたく、跳躍力にすぐれ、動物の密生した毛のあいだをすり抜けて前進します。イヌノミとネコノミはよく似ていますが、ネコノミのほうが丸く小型です。ともに雌のほうが大型です。

雌は動物の体表に産卵し、卵は2～12日で幼虫になり、その後約1か月かかって成虫になります。卵は動物の体表から落ちて地上や床で発育し、砂地やゴミのなかで成虫となり、動物が近づくと跳びついて寄生するのです。成虫は動物の血を吸わなくても相当長く生きているものです。動物を飼ったのち、数か月空にしておいた部屋へはいると、そのとたんに床から無数の飢えたノミが跳びかかってくることがよくあります。

個体によってノミの寄生を受けやすいものと、そうでないものとがあります。動物の首，頭，背などの皮膚に黒いケシ粒くらいのかたまりが散乱していることがありますが、これはノミの排出物です。ノミがとくに集まるのは頭，くび，背，尾のつけ根，腹などです。

ノミはからだに似合わず大食いで，多数の寄生を受けると動物は貧血を起こします。また刺傷のため皮膚炎を起こしたり，細菌などの感染も受けやすくなります。そしてノミの唾液による強いかゆみのため，動物は神経質になり，かきむしって，さらにひどい皮膚炎や脱毛になります。

根本的にノミを一掃するには，その繁殖場所を捜し，卵，幼虫，さなぎ，成虫をすべて除くことです。動物が休む場所，寝小屋，その周囲の床や砂地や縁の下などが繁殖場所です。室内ではじゅうたんのなか，畳の目，ほこりのたまる場所です。ほこりは掃除機で吸いとり焼却します。土間やコンクリの床は洗い流し，月に3，4回殺虫剤を散布します。フェニトロチオン，マラソン，ジクロルボス，ディプテレックスなど低毒有機燐剤がよいでしょう。室内にもこれらの乳剤を噴霧します。劇薬が多いので専門家にご相談になってから使ってください。

次に動物に寄生している成虫を駆除しなければなりません。これは動物の種類や年齢に応じた薬を選ばないと中毒を起こしますし，同じものばかり使っているとノミに耐性ができてしまうので，ときどき薬を替える必要があります。一般的な駆除法を列記してみましょう。

〔梳櫛で毛をすいて取る〕 ネコは薬に敏感なので，この方法が安全です。短毛のイヌや子イヌもよいでしょう。ノミのついた櫛はすぐ水のなかに沈め，水中でノミを落とします。水につけないと，ノミは跳んで逃げてしまいます。



〔薬の散布〕 ノミ取り粉やスプレー式の殺虫液をからだ全体にふりかけ，数分間待って新聞紙の上でブラシや櫛をかけて弱ったノミを落とし，新聞紙といっしょに焼き捨てます。その後，殺虫剤がはいったシャンプーや石鹸を使って入浴させ，薬とともにノミを洗い落としてしまいます。

入浴ができないときは，殺虫剤を3，4日ごとにからだへ散布します。その時は全身でなく，耳の後ろ，首の周囲，背筋，尾のつけ根など細い帯状に，皮膚にすりこむようまきます。多量に広くまきっ放しにすると，なめたり揮発したガスや粉末を吸いこんで，中毒を起こします。ネコには毒性の弱いアレスリン，ピレトリン系などの除虫菊の有効成分の合成剤がよいのですが，これも多量に使うと害が起こります。



〔殺虫剤を浸みこませた首環をつける〕 ノミ取り首環とか，ドッグバンドなどの名で市販されています。揮発性の有機燐系殺虫剤をプラスチックや布に浸みこませてあるので，これをつけておくとノミは死んだり寄りつかなくなったりします。効力は3か月くらいですが，皮膚の弱いイヌやネコには用いないほうがいいです。

〔内服薬による方法〕 ある種の有機燐系化合物をイヌに週1，2回飲ませます。薬はイヌの血液中に吸収され，ノミがイヌの血を吸うとノミのからだにはいり殺虫効果を出します。からだの弱いイヌや妊娠中のイヌ，それにネコでは中毒を起こす恐れがあるので用いないことです。



こうした方法でノミを殺すことはできますが，薬の有効期間が過ぎたり，ノミに耐性がついたりすると，再びすぐ寄生します。たいせつなのはノミの繁殖場所に対する処置です。動物のからだの手入れはもちろん，その住む環境をつねに清掃・殺虫してノミの繁殖を防がねばなりません。■　（動物愛護協会附属病院長）



入院した私とスズメ

わたしは先ごろ，かぜをこじらせて入院した。病院の大きな玄関の横にはイチョウの大木が空にそそり立ち，葉が茂ってなかのようすが見えないほどになっていた。入院して何日かして，わたしはそのイチョウにスズメがときどきくることに気がついた。

病院の規則はいろいろある。おうちゃくなわたしはあまり覚えようともせず，必要なときに係りの人に相談することにしていたが，大決断のすえ，スズメたちに食べ物を与えることにした。というと大げさだが，この病院はまことに規則正しく，清潔なので，食べ物を投げるなどとてもできないような気がしたのだ。

わたしの病室は2階の個室なので，窓をあけて御飯の残りやパンくずを玄関のコンクリート屋根にまいておいた。窓をしめカーテンを引き，すきまからのぞいてみた。しばらくは食べるようすもない。パンくずから虫がわくようにでもなったらたいへんだと思案しているうち，1羽，2羽と降りてきて，きれいに食べてくれた。そのうちスズメたちもすっかり覚え，チチチ，と呼ぶと寄ってくる。子スズメを連れたのもいて，親スズメはせっせと子スズメの口にパンくずを押しこむ。

何年か前，巣から落ちた子スズメを育てたことがある。それ以前も何度か子スズメを拾ったが育てられなかった。考えたすえ，保温の問題かもしれないと思いつき，ふところに入れてみた。

よくふんをするのでチリ紙やハンカチなどをいっぱい入れ，その上にそっとおいた。心得たもので，わたしが家事をしている間も，ほとんどじっとしており，ときどきえり元に出てきてわたしのほおをつついたりする。

パン切れに牛乳を浸してやると，よく食べ，夜はわたしの腕の上で眠り，たくましいスズメに育った。

かわいくてかわいくて，一生ともに暮らすかもしれないなどと思った。しかし，だんだんわたしのそばで食事をしなくなり，家のなかを所狭しと飛びまわり，険しい目をした野性のかたまりのようになった。気のせいか，外で他のスズメどもが呼んでいるように思えたので，ある日，窓をあけて放してやると，「チチ」とひと声鳴いて飛び去った。それ以来，わたしはスズメにかぎらず，小鳥を飼うことを考えなくなった。自然のものは決して，オモチャにすべきではない。

自然はすっかり荒れはてたが，スズメは強い。農薬にも大気汚染にも負けないし，姿と声の美しさゆえにオモチャにされることもない。野にも里にも住宅街にもいて，巣をつくり食べ物をあさって，たくましく生きている。そのうち世のなかも変わるかもしれないし，スズメよ，ガンバレ!!　■　（小平市・工藤須美）

裏表紙説明

ベニマシコ（雄）　もうおなじみのこの情景。でも，小さな鳥が，けなげにひなを育てる姿は，何度見ても，そこはかとない哀感をそそられるものです。

ベニを塗りたくったような羽色。人を恐れず，「ツチチチチ，チチベ，チチベ」と可憐なさえずりを聞かせてくれるこの鳥は，全長約17センチ。でも，尾の長さがからだの半分ほどもあるので，スズメよりも小さく見えます。

チベット，中国北部，シベリアにすみ，日本でも，北海道の草原や低木林などで繁殖し，秋から冬にかけては，本州にも渡ってきます。■　撮影　水野仲彦

▶訂正　82号29ページ，「漢字のふるさと」59──→58

次号予告

10月18日発売



ペルーイワドリ

世界動物百科
84号　10／29

カラーページ

スズメ目（つづき）
- コトドリ科　コトドリ
- ヤイロチョウ科　ヤイロチョウ
- タイランチョウ科　ヒガシキングバード
  エンビタイランチョウ
- マイコドリ科　シロクロマイコドリ
- カザリドリ科　ギアナイワドリ，カサドリ
- アリドリ科　アカメアリドリ
- カマドドリ科　セアカカマドドリ
- ヒロハシ科　アズキヒロハシ

私たちの仲間

ニッポン列島探鳥記 6 **野田・サギ山の「終焉」**	編集部
雪の島から 2 ヒグマと2人のイノシシ 80	畑　正憲
ヤイロチョウ撮影記 カラーページ解説	高野伸二
鳥の世界――もうひとつの見方―― 20 いくつになれば繁殖できるか	浦本昌紀
漢字のふるさと 60 鴨（カッコウ）	藤堂明保

第65号～第128号（鳥類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊

第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容

本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3　〒100
TEL. 03－212－0131

朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3　〒530
TEL. 06－231－0131

朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1　〒802
TEL. 093－531－1131

朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3　〒460
TEL. 052－231－8131

世界動物百科　通巻83号　昭和47年10月22日発行（毎日曜日発行）　編集・発行人　大田信男　発行所　朝日新聞社　東京　大阪　北九州　名古屋　印刷・凸版印刷　定価220円



ベニマシコ　説明 30ページ